

旅人（バックパッカー）が書き、旅人が読む、旅人のための旅ライフフリーペーパーマガジン

Bravi

ゴールデンウィーク弾丸バックパッカー / テーマ「旅で気づいた幸福論」 / 旅先の変な日本語
Bravi Biz「旅」×「ビジネス」
旅で使えるスマホアプリ
情熱さえあれば不可能なことはない
Chibirockの旅はくせもの
HANGOVER in the WORLD
旅人からの伝言「特集 ヨーロッパ」
トホホな話 / 一本の糸で世界をつなぐチャリの旅 / 自炊派の手料理
エッセイたびたべ / アジア漂流日記

Vol. 5

Photo(C)bin



Khaosan Tokyo Guest House

<http://www.khaosan-tokyo.com/ja/>

日本で海外の気分を楽しめる!

カオサン東京ゲストハウスは、東京、京都、福岡、別府に計8つの店舗を展開しています。
国際交流をしたい! 安く快適に泊まりたい! 楽しくにぎやかに滞在したい方!
観光、就職活動、一人旅等、あらゆるお客様に満足していただける宿泊施設です。



TOKYO

NINJA

1泊/2200円~

ORIGINAL

1泊/2000円~

SAMURAI

1泊/2500円~

ANNEX & SMILE

1泊/2000円~

KABUKI

1泊/3000円~

KYOTO

1泊/2000円~

BEPPU

1泊/2000円~

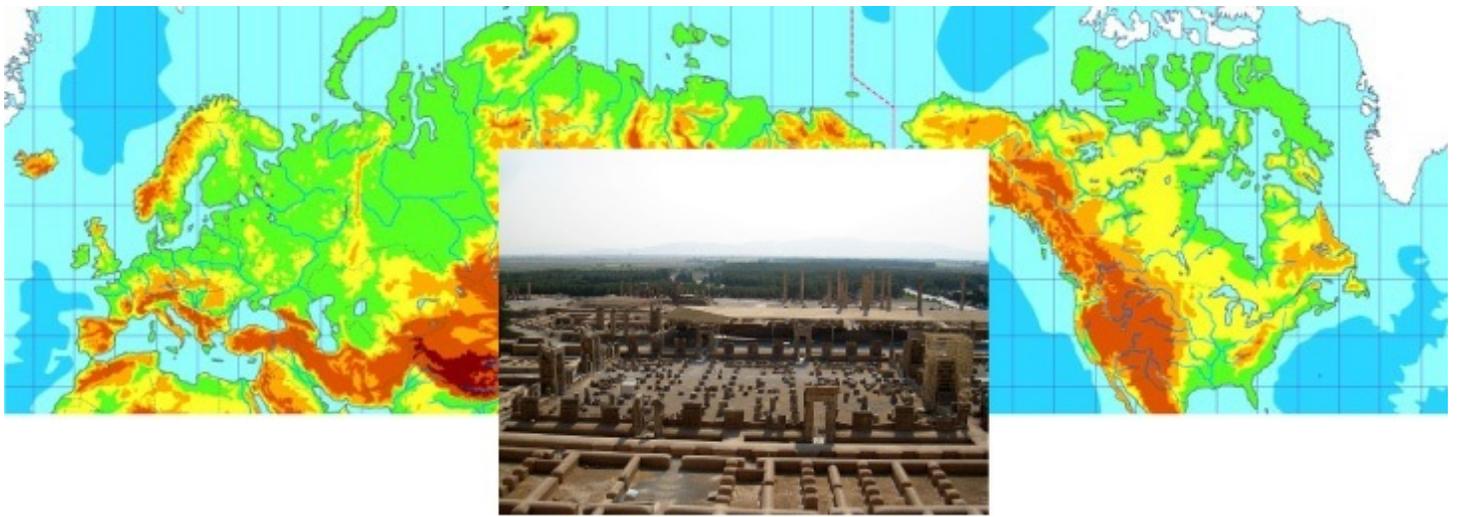
FUKUOKA

1泊/2400円~



CONTENTS

- ゴールデンウィーク弾丸バックパッカー
- テーマ「旅で気づいた幸福論」
ブータンで気づいた『幸せ』
光のギリシャ
幸福論
- カオサン通りのB-BOYたち
- 旅先の変な日本語
- Brali Biz 「旅」×「ビジネス」小塚正樹
- 旅で使えるスマホアプリ
- 情熱さえあれば不可能なことはない
- Chibirockの旅はくせもの
- HANGOVER in the WORLD 「キューバの酒」
- 旅人からの伝言「特集 ヨーロッパ」
ヨーロッパの秘境バルカン半島
プラハのサンタクロース
- トホホな話
- 一本の糸で世界をつなぐチャリの旅
- 自炊派の手料理「鶏肉の親子炒め」
- エッセイたびたべ
- アジア漂流日記
- 世界の標識・アイコンコレクション
- 作者・情報提供者一覧
- 編集後記
- 次号予告
- 記事募集



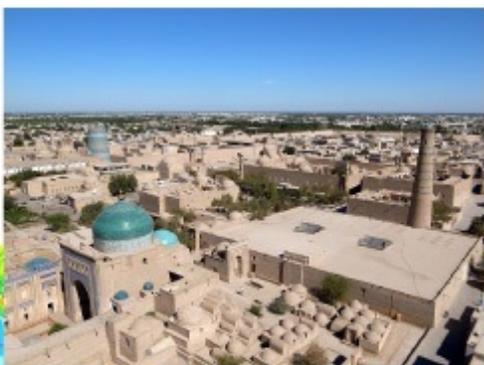
イラン・イスラーム共和国

✈️ ゴールデンウィーク

弾丸

バックパッカー ✈️

社会人になると、年末年始と夏休みを除いて旅に出れるのは、もうゴールデンウィークくらいしかなかったりする。なんとかそのチャンスを生かし、普段の生活を離れ、頭のチャンネルを変えたい。前回の「年末年始」よりも更にマニャックな3箇所が出揃いました。スーツを脱いでバックパック背負って行ってらっしゃ〜い！

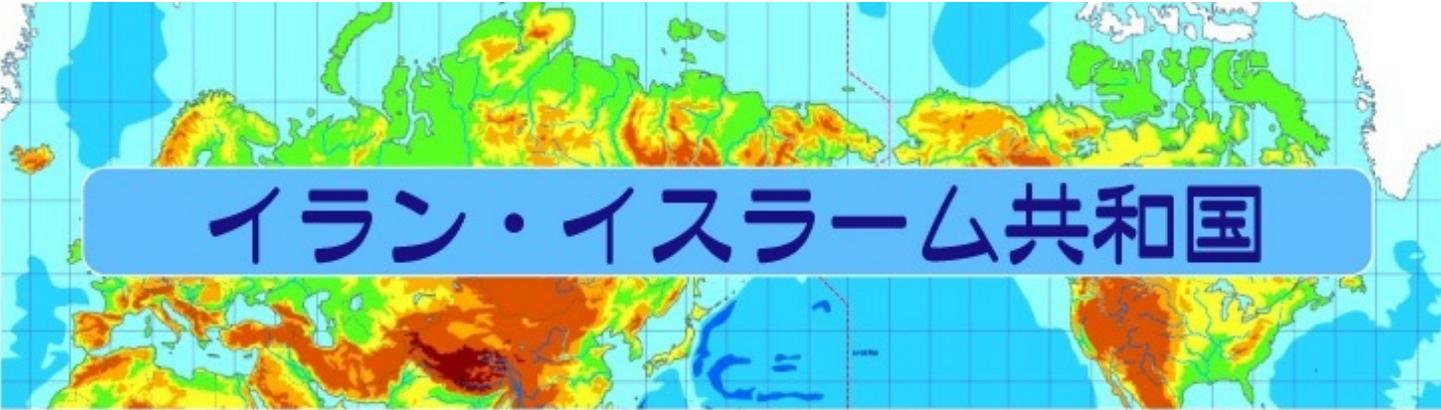


ウズベキスタン共和国



キューバ共和国

ご紹介するデータの中には数年前のものも含まれます。交通の便の有無、時間や料金などをご自身でご確認ください。またその地域の治安などは変化しますので、その都度ご確認の上ご計画ください。



イラン・イスラーム共和国

1日目：関空～ドバイ経由～テヘラン（機中泊）

2日目：テヘラン着テヘラン観光～シーラーズ（夜行バス）首都テヘランに昼前到着。ゴレスターン宮殿やグランド・バザールなどを見学して夜行バスでシーラーズへ。

3日目：シーラーズ 世界遺産パサルガダエ、ペルセポリスなどを観光。ペルセポリスはパルミラ・ペトラとならんで中東の3Pと呼ばれています。

4日目：シーラーズ～ヤズド（夜行バス）

シーラーズ市内観光。2011年世界遺産に制定されたペルシア式庭園エラム庭園やマスジェデ、マドラセなどなどを見学。

5日目：ヤズド～イスファハーン（夜行バス）ゾロアスター教の聖地ヤズド。旧市街、沈黙の塔、ゾロアスター教寺院など。ここのドウラト・アーバード庭園も世界遺産。

6日目：イスファハーン かつて「世界の半分」と呼ばれたイラン観光のハイライト。世界遺産イスファハーンのイマーム広場、世界遺産チェヘル・ソトゥーン庭園博物館、マスジェデ・ジャーメ、アルメニア教会、ゾロアスター教の神殿などなど見所盛りだくさんなので最低2日は欲しいところ。

7日目：イスファハーン～ゴム（夜行バス）

8日目：ゴム～テヘラン～ドバイ経由～関空（機中泊）

早朝（3時半ころ）ゴム着ハズラテ・マスアーメの聖廟にて仮眠後見学。イスラム教シーア派聖地の一つです。見学後乗り合いタクシーでテヘランへ。テヘランに昼頃到着。イラン考古学博物館などを見学後空港へ



■Writer&Photographer

三矢英人

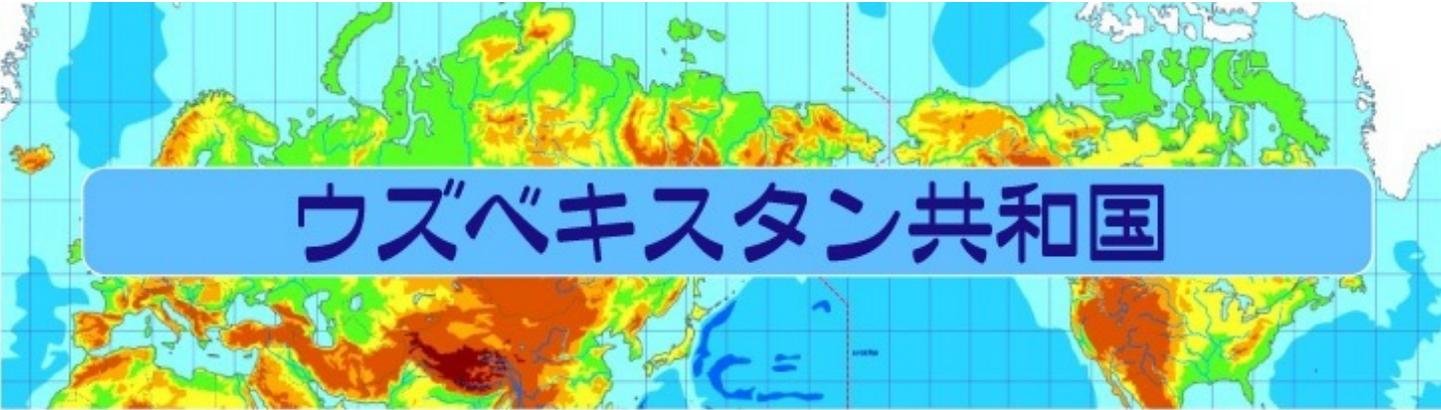
■Age

25歳

■Profile

大好きだった世界史の授業に出てくる数多の遺跡・建造物を自分の目で見ると海外へ旅立ち、その魅力にはまる。世界中の遺跡・建造物・自然・酒・飯を堪能するべくいつかは世界一周、と思いながら日々次の旅への思いを馳せるリーマンパッカー。

Twitter:hideto328



ウズベキスタン共和国

1日目：名古屋～仁川経由～タシケント（タシケント空港泊） 夕方タシケントに到着後夕食をとりタシケント市内へ。翌日のフライトが早いので空港で寝ようと試みるも空港内には入れず空港外のベンチで就寝。

2日目：タシケント～ウルゲンチ～ヒヴァ 早朝ウルゲンチに飛び、そこからヒヴァの世界遺産イチャン・カラへ。イチャン・カラは何百年も時間が止まってしまっているかのような都市で圧巻。

3日目：ヒヴァ～ブハラ 乗り合いタクシーで8時間移動。途中アムダリア川の向こうにトルクメニスタンが見えます。

4日目：ブハラ 他の都市と比べてインパクト弱めなブハラですが、カラーン・ミナレットは圧巻。お土産物のクオリティの高さも特筆すべきところがあります。

5日目：ブハラ～カラシ～シャフリサブス～サマルカンド 通常はブハラ～サマルカンド～シャフリサブスのルートで進むのですが、時間節約のためブハラから直接シャフリサブスを目指すことに。

6日目：サマルカンド ウズベキスタン観光のハイライト世界遺産サマルカンドー文化交差点。レギスタン広場、アミール・ティムール廟、ビビハニム・モスク、シャーヒズィンダ廟群など見所盛りだくさん。

7日目：サマルカンド～タシケント～仁川（機中泊） 乗り合いバスでタシケントに昼頃到着。ティムール博物館、ナヴォイ・オペラ・バレエ劇場や旧市街を観光後空港へ。

8日目：仁川～水原～羽田 トランジットを利用して一日韓国観光。



■Writer&Photographer

三矢英人

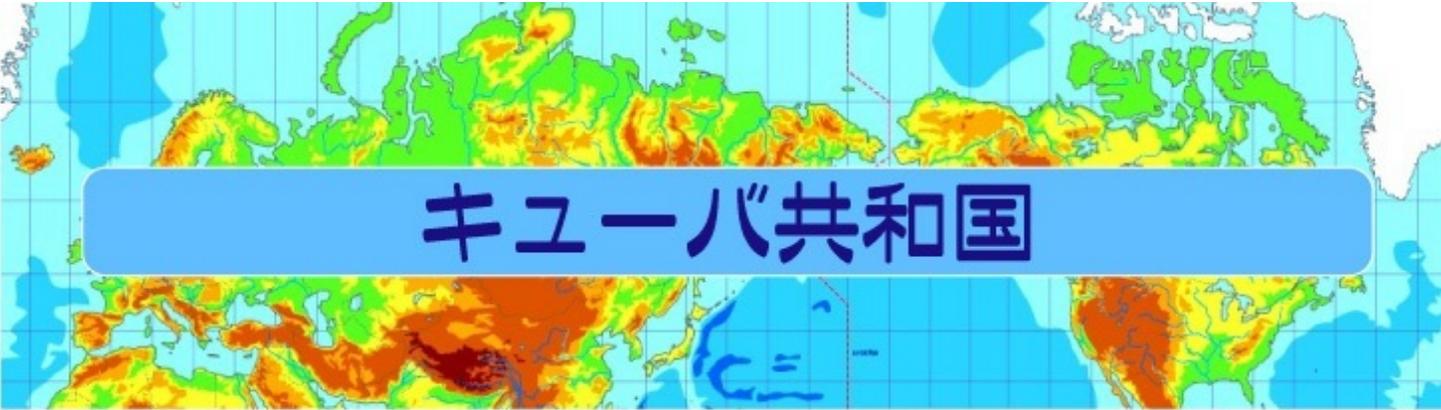
■Age

25歳

■Profile

大好きだった世界史の授業に出てくる数多の遺跡・建造物を自分の目で見るため海外へ旅立ち、その魅力にはまる。世界中の遺跡・建造物・自然・酒・飯を堪能するべくいつかは世界一周、と思いながら日々次の旅への思いを馳せるリーマンパッカー。

Twitter:hideto328



キューバ共和国

1日目：成田～トロント経由～ハバナ

2日目：ハバナ 世界遺産の旧市街観光を中心に。旧市街は狭い範囲に見所がまとまっているので回りやすい。旧国会議事堂や市立博物館など。

3日目：ハバナ～サンティアゴ・デ・クーバ（夜行バス）

ハバナ2日目は要塞巡り。カサ・ブランカ地区でモロ要塞やカバーニャ要塞を見学後第1ゲバラ邸宅へ。旧市街へ戻って革命博物館を見学。

4日目：サンティアゴ・デ・クーバ キューバ革命発端の地サンティアゴ・デ・クーバ。カストロが襲撃した7月26日モンカダ兵営博物館や旧市街を観光。旧市街は歩いているだけで楽しい。夜はカサ・デ・ラ・トロローバで本場のキューバ音楽を堪能。

5日目：サンティアゴ・デ・クーバ～サンタ・クララ（夜行バス） サンティアゴ・デ・クーバ2日目は世界遺産モロ要塞ことサン・ペドロ・デ・ラ・ロカ城や、コブレの聖母寺など郊外の見所を観光。

6日目：サンタ・クララ～ハバナ 革命家チェ・ゲバラが眠る街サンタ・クララ。チェ・ゲバラ霊廟やトレン・プリンダード列車記念碑など。チェ・ゲバラ霊廟の博物館は見ごたえあった。

7日目：ハバナ（空港泊） ハバナ3日目はヘミングウェイ縁の地巡り。『老人と海』の舞台になったコヒマルやヘミングウェイ博物館など。新市街や旧市街で行き残したところを巡っても○

8日目：ハバナ～トロント経由～成田

9日目：日本到着



■Writer&Photographer

三矢英人

■Age

25歳

■Profile

大好きだった世界史の授業に出てくる数多の遺跡・建造物を自分の目で見るため海外へ旅立ち、その魅力にはまる。世界中の遺跡・建造物・自然・酒・飯を堪能するべくいつかは世界一周、と思いながら日々次の旅への思いを馳せるリーマンパッカー。

Twitter:hideto328

旅で気づいた幸福論

あら！幸せって
なるものなのかしら？

幸せになろう！

とある国では、今日食
べるものもなく必死に
生きようとしている。
にも関わらず幸せそ
う。かたや日本では食
べ物の廃棄は世界トッ
プクラスながら自ら命
を断つ人が毎年3万
人。
幸福って？

- ブータンで気づいた『幸せ』
- 光のギリシャ
- 幸福論（前編）
- カオサン通りのB-BOYたち



ブータンで気づいた『幸せ』

■Writer&Photographer

ワールドハッカー

■Age

31歳

■Profile

元バックパッカー、現在は職業ハッカー。

ブログ『World Hacks!』にて海外旅行関連の情報を毎日発信しています。

<http://bit.ly/WorldHacks>

「幸せ」とは何か？ということを探るために、2009年夏、ブータンに行ってきた。

ブータンでは、2005年の国勢調査で97%の国民が「幸せ」と回答したことで知られており、「幸せ」という抽象的な感情の実態を知るには最適な場所と考えた。

旅の目的としては2つ。

ブータン国民が感じる「幸せの要素」を自分なりに把握・理解すること。そして、その要素を自分自身に取り入れることにより、胸を張って「幸せだ！」と言えるようになるためのヒントを得ること。

結果から言わせていただくと、2つの目的は達成できた。その内容について『国』『思想』『生活』という3つの観点で説明させていただく。



『国』

ブータンは、中国とインドに挟まれた人口約70万人の小さな国。第4代国王が提唱した「国民総幸福量(GNH)」という概念のもと国が統治されている。その概念は「持続可能で公平な社会経済活動」「環境保護」「文化の推進」「良き統治」という4本柱で構成されており、さらにそれらが9分野72指標により事細かく策定されているということらしい。このようなしっかりした生活の基盤が国民の「幸せ」につながっているのではという印象を受けた。

具体的には、「教育・医療が無料」といった生活直結の事項や、「持続可能な開発」「環境保護」など国策で長期的に継続できるような国作りがされているといった事項などが挙げられる。これらのことから、ブータン国民としては、現状の生活に対する不満、また将来に対する不安感はあまり感じられないのではないか。と気づきがあった。



『思想』

ブータンは、チベット仏教を国教としている。旅をしていて、ブータン国民の信仰心が厚いということは嫌というほどよく分かった。マニ車、ダルシンなど、徳を積むためのものが生活にとけ込んでおり、家にも一番良い場所に仏間があったりする。

チベット仏教には様々な教えがあるのだろうが、現地でブータン人と話して『足るを知る』という思想が浸透していることを感じた。「今を満ち足りた状態とし、現状に不満を持たない。そして、己の身の程を知り、多くを求めない」という思想。「人間の欲望は際限が無い」とよく言われる。この欲望を断ち切ることで、これが重要なのではないかと気づかされた。

チベット仏教法王のダライ・ラマ14世もこのような言葉を残している。

「もしあなたが質素に暮らしていれば、きっと充足感を得られるでしょう。シンプルでいることは、幸せであるために非常に重要なことなのです」



『生活』

「幸福の国」と言われるものは作られたもので、実際はウソなんじゃないか？と、疑い深い私は頭のどこかでそう思っていた。そんな私が出会ったブータン人にした質問が2つ。

- ・あなたは幸せですか？
- ・ブータン人の90%以上の人々が「幸せ」と言っているというが、それは本当だと思いますか？

そしてその回答は、両方とも"YES"。話を聞いた感じでは、どうやら本心で言っているようだ。

しかし、なぜ、彼ら彼女らはそのように感じているのか？10日程度の短期間では幸せの要素はなかなか見えてきそうにない。そんな旅も終わりに差し掛かった頃、民家にホームステイする機会があり、そこで気づきがあった。

ホームステイ先はブータンの標準的な農家。3世代が和気あいあいとして非常に仲がよい。私もその家族の一人のように迎えられた。食事中にワイワイ会話をしながら、世界一辛いと言われるブータン料理のエマダツィ(唐辛子のチーズ和え)を食べている。さすがに毎日食べているとはいえ、唐辛子は辛いらしく、ヒーヒー言いながら食べている。

この光景を見た時、小学生の頃に見た、TVドラマの「裸の大将」のワンシーンがフラッシュバックした。

それは裸の大将がカレーを食べながら、離婚間際の夫妻とその子に対して、「カ、カレーを食べる時、こんな風にみんなでスプーンでお皿をカチャカチャ鳴らせながら、家族全員で食事をするのが、し、幸せなんだなあ……」というシーンであった。(その

後、その夫婦は離婚を思いとどまったのは言うまでもない)

日本から遠く離れたブータンで裸の大将のワンシーンを思い出すのも変な話であるが、その家族全員で唐辛子を食べながらヒーヒー言っている姿がそのシーンにオーバーラップした。

「幸せ」は既に目の前にあった。むしろ自分もその中にいた。それに気づくか気づかないの違いだった。

以上、これらの気づきからブータン人の「幸せの要素」を掴むことができた。今後はこれら幸せの要素をヒントに以下のように日々を送りたいと思う。

「安定した心の状態を維持するための安定した生活基盤を築く！その中で『足るを知る』という思想のもと、自分を取り囲むすべてに感謝しながら生活する！」

世界一幸福と言われるブータンの公用語であるゾンカ語には「幸せ」という単語は存在しないようです。「幸せ」はブータン人にとって当たり前すぎるのでしょうか。「幸せ」とはまだ奥が深いようです。





光のギリシャ

■Writer&Photographer

96 Happy World Journey ゆーじ & ありさ

■Age

30歳代

■Profile

2010年3月から夫婦で世界一周へ。2011年10月帰国。ホームページでは旅の日記、写真、動画、特集ページなどを通して、地球の美しさと旅のワクワクを発信中。96Happy World Journey

<http://96happyworldjourney.web.fc2.com/>

観光シーズン真っ盛りの8月のギリシャで、エーゲ海の島々を巡った。

夏のギリシャは、島全体が幸せに溢れているように見えた。

夕暮れ時に、夕陽だけを求めて人々が集まる感じ。安いワインを囲んで、近所のおじちゃんたちがいつまでもしゃべっている感じ。朝陽にキラキラと輝く海を感じ。

そこで目の前に広がっていたものは、「幸せ」以外の何ものでもなかった。

きっと、人が幸せを感じるのは、人と人の間にほんわかと存在する愛情を感じる時や、美しいもので心が満たされた時だろう。そういう意味で、ギリシャの島は、美しいもので溢れっていて、人と人との繋がりが密で、幸せを感じやすい場所なのだ。

エーゲ海に浮かぶ島々は、昼間、まぶしいくらい光に包まれている。島を囲むのは、宝石のように輝く碧い海。小路の角には、ピンクや白のブーゲンビリアが咲き、島をかわいらしく彩っている。

目に入るものすべてが美しく、暑すぎない気候は心地よく、まるで光の中を歩いているような、夢のような感覚に陥る。

どんなに多くの観光客が細い路地を行き来しようとも、島全体を包むゆったりとした空気は変わらない。

猫が塀の上で日光浴をし、ロバがチリンチリンと心地よい鈴を鳴らして坂を登り、波一つない海上では船が白い航跡を残しながらゆっくりと進む。ギリシャの太陽が、誰をも華やいだ気持ちにさせる。気の向くままに島を歩くうちに、心がしっとりと落ち着いてくる。

陽が傾き始めると、それまで町のいろいろな場所でそれぞれの時間を過ごしていた人たちが、当たり前のように移動して大集合し、ひとつのものをわくわくしながら待つ。人々の顔も家々の壁の色も、少しずつそれと同じ色に染まっていく。地平線上にぼんやりとオレンジ色のもやのような光を残して、それが姿を消すと、島は暗がりの中へ。



毎日、島中の人々が決まって夕陽に魅了され、美しいもので心を満たして夜を迎える。

次の日は、また、まぶしい光の世界。太陽が昇り、沈む限り、この美しい営みはいつまでも繰り返されるだろう。

しばらくすると、レストランやホテルの電気が灯り始める。賑やかなディナータイムの始まり。

食堂には、近所のおじさんたちがたむろして、松脂ワインとおつまみで、いつまでも話し込んでいる。おばさんたちは、たいてい小太りで、たくましく食堂を切り盛りしている。

島のおばあさん達は、黒服の人が多い。ギリシャの女性は未亡人になると、亡き人を想いながら黒服で余生を過ごすそうだ。

島々に滞在している間、何度も何度も美しさに心が満たされた。そして、何度も何度も人と人の間に存在する愛情を感じた。

ギリシャの島々は、「幸せ」をはっきり目にすることができる不思議な場所だ。



ギリシャの人々自身が「幸せ」を感じているかどうか調査した、面白いランキングがある。「幸福度」を測るランキングは様々あるけれど、この調査は、シンプルに「あなたは個人的に自分の人生はハッピーですか？」という質問に答えるもの。

財政危機が叫ばれるギリシャだが、2011年8月にドイツの財団が欧州13カ国、1万5千人を対象に調査した結果、デンマークに続いてギリシャは第2位、80%もの人が「幸せ」と答えた。一方、経済優等生のドイツは下から3番目、61%の人しか「幸せ」と回答しなかったようだ。

この調査結果から、国家経済と個人の感じる「幸せ」は違うんだということが分かる。ドイツ人と国民性が似ていると言われる日本では、「自分の人生が幸せである」と即答する人はどれくらいいるだろうか。



日本に帰国して、ある時ふと夕暮れ時の空を見て、あまりの美しさにびっくりした。日本にいと、つつい経済的生産性を優先してしまうけれど、ふと夕陽を見てみたり、しばらく会っていない友達に連絡してみたりするだけで、ちょっと幸せになれる。

ギリシャみたいに、光いっぱいとはいかなくても、毎日の生活の中で、小さな幸せを積み重ねていきたいと思う。

幸福度調査の出典：Foundation for Future Studies ホームページ
<http://www.stiftungfuerzukunftsfragen.de/nc/en/news/news/article/daenen-sind-die-gluecklichsten-europaeer.html>





幸福論(前編)

■Writer&Photographer

鈴木モト

■Age

30歳代前半

■Profile

男性 静岡県出身。高校時代、陸上でインターハイ出場。ベストタイム10秒84(100M)

美容師免許、管理美容師免許取得。

MIXIコミュニティー、「鈴木が書く世界一周旅行記が好きだ」2800人突破。

http://mixi.jp/view_community.pl?id=3502328

現在、一眼レフカメラ片手に世界を放浪中。

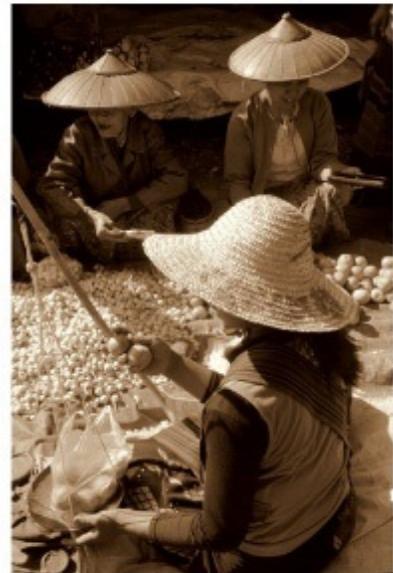
ブログ「地球の迷い方。～世界放浪編～」

<http://ameblo.jp/roundtheworld200130/>

「ちょっとベトナムに行ってくる！」と言って、旅立って行った知り合いが数多くいる。

日本から手軽に行ける国ベトナム。人気のベトナム。バイクの多いベトナム。俺は今から約3年前に、南北に長いベトナムを、約一ヶ月かけ縦断した。

旅で気づいた幸福論



ベトナムのラオカイ国境では、職員の女性に60ドル騙し取られ泣きそうになり、ホーチミンでは、バイクに乗った強盗に、一眼レフカメラをひったくられ、天を仰いだ。

だが……、日本を出たばかりの俺にとって、ベトナム縦断の旅は、刺激に満ちた大冒険だった。さまざまな出来事があり、数多くのドラマがあった。

「何処の町が一番良かったか？」 1ヶ月間をフルに使い、さまざまな町を訪れたが……、一番良かった町は何処だったかと聞かれれば、俺は真っ先に「サパ！！」と答えるだろう。

ある思い出深い出来事があった「1日」に的を絞って、詳しく書いていきたいと思う。

それでは……、その思い出深い日となった、2009年の3月13日に、時計の針を巻き戻してみたいと思う。

【サパでのある1日】

2009年3月13日……、この日……、目を覚まし時計に目をやると、既にAM10時だった。ベットから起き上がり、伸びをする。木で作られた窓に目をやるが、ホテルが隣接されているせいで、隣の建物の壁しか見えな

い。窓から陽射しが入ってこないのので、質素な部屋の中が、より一層寂しく見えた。

少しだけ開いている窓から、子供達の声や、道行く人の話し声が聞こえてきた。外は活気づいている様だ。

シャワー室に入り、着古した服を脱ぐ。6分を過ぎると温水が出なくなる、素晴らしいシャワーを急いで浴び、俺はカメラ片手に、1泊5ドルのホテルを飛び出した。

ホテルの外に出ると、薄暗い部屋の中とはうって変わり、強い日差しがサパの町を照り付けていた。空気は少し冷たいが、思っていたよりも、陽射しが強い。俺はトレーナーを脱ぎ、腰に巻くと、太陽の陽射しを正面に浴びながら、宿の前の坂道をのんびりと登った。





さて今日は……、ちょっと遠くに存在する、ライチャウという少数民族が暮らす村まで、歩いて行ってみようか。

坂道を登りきり、人の往来が多いサパの市場に入った。市場は相変わらず活気があった。屋台の出店の上に積み重ねられた、カラフルな野菜達を、地元の主婦らしき人が、じっくりと品定めをしながら、カゴの中に入れていく。その横では、赤や紺色の衣装を身にまとった少数民族達が、手作りの衣装を並べ、道行く人に声をかけていた。そしてそのすぐ横では、大きなカメラを持った観光客が、少数民族達をカメラに収めている。カメラを向けられた少数民族達は、「アクセサリ見てってよ！」と言う様に、観光客に猛烈に営業をかける。

サパでは、地元民と少数民族と観光客が共存している所が、何とも面白い。

豚の生首や、犬の姿焼きが置かれている肉屋を横目で見ながら、細い路地裏に入る。

まだ解体されたばかりなのだろうか。生臭い血の匂いが立ち込めている。



肉を買い漁る主婦らしき人を横目で見ながら、足早に通り過ぎた。市場を抜け、ホテルやゲストハウスが並ぶゆるい下り坂を、早足で下っていく。

今日は天気が良く、見晴らしが良い。トレッキングには最適だ。サパの町をはずれ、5分程歩くと、家々が急に少なくなり出した。さらに10分程歩くと、美しい段々畑や、緑いっぱいの山々が姿を現した。

サパは小さな町だ。町から少し歩いただけで、この様な絶景が姿を現す。そして、道路の真ん中を、牛や豚がのっしのっしと我が物顔で歩き、山の斜面に作られた段々畑の中を、水牛やにわとりが自由に歩く。

日本を出て、まだ2ヶ月目の俺にとって、こういった景色や動物達の存在が新鮮で、見ていて胸が躍る。





途中、のどが渴いたので古い売店に寄り、ペプシとポテチを買い、大きな木の下ベンチに、ドカッと座った。汗を拭い、ペプシを開ける。

木の上から鳥の鳴き声が聞こえ、遠くの小学校から、子供達の歌声が風に乗ってやってきた。日差しは相変わらず強いが、風も無く、気持ちがいい。何だか幸せな気分になりながら、ペプシで喉を潤す。

ベンチに座って、こうしてサパの景色をのんびりと楽しんでいると、数ヶ月前の日本で働いていた日々と、全く違った毎日を送っているなど、改めて感じてしまう。

旅に出て……、時間の流れ方が随分変わったと思う。

嫌な仕事を任された時や、つまらない授業を受けていた時は、1時間がとても長く感じた。そして1日が長かった。でも旅に出てから……、朝目を覚ましてから夜ベットに入るまでが、とても短く感じる様になった。1日1日がとても短く感じるのに、日本を出

発した2ヶ月前が、遠い過去の出来事を感じるから不思議だ。それはおそらく、日本を出てからの2ヶ月の間に、さまざまな出来事があったせいだと思う。きっと、思い出す出来事が多いから、日本を出発した日が遠い過去に感じるのだろう。

そして……、旅に出て、最初は戸惑った。出発前の日本では、仕事の他に週6でバイトをし、本当に忙しかった。遊びの予定も入れたいから、仕事とバイトの合間に、無理やり遊びの予定を入れていた。暇な時間は全く無かった。

でも旅に出たその日から、やらなければならない予定が無くなった。誰かと会う約束も無ければ、こなさなければならない仕事も無い。携帯電話も手放したものだから、旅に出た当初は生活の変化に戸惑った。

だが、何かに縛られる事が無くなったのが、本当に嬉しかった。それだけで、旅に出た意味があった気がした。ペプシを置き、ポテチの封を開ける。



そしてここサパは、沢山の子どもが、元気に走り回っている。子どもの数が本当に多いと思う。

子だくさんのサパの家族。サパでは子供でも、重要な働き手になるからだろう。畑仕事を手伝ったり、山に薪を拾いに行ったり、水汲みをしたり、家事を手伝ったりと、子供でも重要な働き手となる。

それに、サパの町に多くいる観光客相手に、服やアクセサリーを売りつける事だって出来る。小さなかわいい子供に、目をキラキラさせながらアクセサリーを勧められたら、人はつい買ってしまいたくなるものだ。

現に俺も数日前に……、5歳と11歳の民族衣装を着た、二人組のかわいらしい姉妹から、ついアクセサリーを買ってしまった。



確か名前は、イェンとリンと言ったか。

アクセサリーを買ってあげた後、5歳のイェンという小さな少女が、ヒョコヒョコ俺の後を着いて来た。歯が生え変わる時期なのだろう。ニコっと笑うと、前歯が無いのがチラリと見えて、何とも可愛らしかった。

英語が出来る11歳のお姉ちゃんのリンと、つたない英語で話しながら歩き、俺の宿の前でさらに30分ほど話した。

印象的だったのが、お姉ちゃんのリンは、学校に行っていないと言っていたが、英語が話せた。俺なんかよりも英語が断然上手かった。おそらく独学で学んだんだろう。感心した。

俺のリュックのポケットに、茶色の水性ペンが入っていたので、紙切れにイェンの似顔を書いてやった。それを見ていたリンは、自分の左手を差し出して、

「私の手に何か書いて」

と言ってきた。

俺はリンの左手をつかみ、水性のサインペンで、彼女の名前を漢字で書いてやったり、自分の名前を英語で書いてやったりした。リンの左手が落書きだらけになった。俺もリンに何か書いてもらおうと思い、リンにサインペンを渡し、

「俺にも何か書いて！」

と手を出してお願いすると、リンは困惑した表情になった。



そしてリンは少し申し訳なさそうに、

「……文字が書けないの……」
と言った。

俺は軽い衝撃を受けた。リンは、俺よりも英語が出来るのに、文字を知らない。自分の中で当たり前だと思っていた事が、1つ崩れていった気がした。

その後、デジカメで日本の写真を見せてやったり、動画を撮って遊んだりした後、また会おうと言って握手をして別れた。

イェンとリンの姉妹は、今日も頑張ってアクセサリーを売っているのだろうか？

ペプシを飲み干し、ベンチから腰をあげる。景色に見とれながら進んでいくと、木陰で、民族衣装を着た人達が、ウロウロしていた。

とりあえず、「ライチャウ」の村はどの方角か聞いてみよう。

声をかけようと、近づいて行くと、小さな子供が一人、もの凄いスピードで突進してきた。そして俺の足にしがみついて来た。

「……あれ……？！？」

俺の足にしがみついてきた子供の顔を覗き込むと、見覚えのある顔だ。子供は俺を見上げ、ニコッと口を開けて笑った。前歯が数本無いのがチラリと見えた。



「おー！イェン！！」

思わずそう叫んでしまった。

ふと顔をあげると、後ろにお姉ちゃんのリンもいる。数日前に会ったばかりだが、懐かしく感じるから不思議だ。背中には、小さな赤ん坊がおんぶされていた。赤ん坊は、スヤスヤと涎を垂らし、気持ち良さそうに眠っている。

「リメンバーミー？(私の事覚えてる?)」

リンはニコッと笑いながら、俺に話しかけてきた。俺の足にしがみ付いているイェンは、不思議そうな顔で俺を見上げている。

「覚えてるよ～！オフコース！！」

俺がそう言うと、リンは少し嬉しそうに笑った。

しっかり者の11歳のリンと、やんちゃな5歳のイェン。かわいらしい姉妹だったので、忘れるわけが無い。

「リンは今から何処行くの?? Where going??」

俺がそう尋ねると、リンは山の方を指差し、

「Back to home! (家にかえるよ～)」

と言った。イェンとリンは、これから家に帰るところらしい。

少数民族のイェンとリン。

二人の家はどんな家なのだろうか? どんな暮らしをしているのだろうか? とても興味がある。そう思った瞬間、

「うちに遊びにおいでよ!!」

と誘ってくれた。

俺はテンションが上がり、即答でOKすると、イエンが、キャーキャー言いながら走り出した。とりあえず……ちびっ子のイエンについて行く俺。そして俺の後ろに、赤ん坊を背負ったリンがついて来る。

今日は、ライチャウの村までトレッキングでもしようと思っていたが、ライチャウの村は明日行けばいい。時間はある。

サパの日差しに目を細めながら、ゆるい下り坂を歩いていると、俺の前をちょこまか走っていたイエンが、俺の元に走り寄ってきた。手には何か握られている。イエンからそれを受け取ける。

「何だこれ……??」

俺は振り返り、後ろを歩いているリン姉ちゃんに、

「この草、食べられるのか」



と尋ねると、真剣な顔で

「NO！」

と言われた。するとまたイエンが駆け寄ってきた。

今度は雑草では無く、花を摘んできてくれたらしい。無邪気でかわいやつだ。

イエンは、前方を見て「キャー」と奇声を発すると、今度は凄いスピードで走り出した。前方には5歳前後の子供が、こちらを見て立っている。イエンはその子供と、一言二言会話を交わすと、一人でゲラゲラ笑いながら道路を転がり始めた。かなり激しく転がっている。

それをみたイエンの友達も、道路を転がりだした。ゲラゲラ笑いながら、かなり激しく転がっている。全身泥だらけになる2人。何だか微笑ましい光景だ。

15分程歩いたらどうか……。前方を走っていたイェンは、舗装されたアスファルトの道からそれて、土の道へと入って行った。この先にイェンとリンの家があるのだろうか？俺はワクワクしながら、山の道へ入って行った。

足元にいた小さな野良犬をかわすと、今度は豚の子供がいた。

そして豚の子供の群れの先には、ニワトリの群れもいた。何だか動物園みたいだ。ひよこ達はピヨピヨ鳴きながら、親鳥の後を必死で追いかけている。

サパの村は、人と動物がうまく共存している気がするが、昔の日本もこうだったのだろうか？

土の道を少し下ると、木で出来たシンプルな作りの、掘っ立て小屋の家々が見えてきた。

掘っ立て小屋の前には、チンチン丸出しの子供たちが、不思議そうな顔で俺を眺めている。この小さな村に、日本人が来る事が珍しいのだろうか？

とりあえず村の子供達に手を振って、イェンの後を追う。

「あれが私の家よ」

俺の後ろを歩くリンがそう言った。

リンが指す方向に目を向けると、一軒の小さな掘っ立て小屋が見えた。イェンが、その中に入って行くのが見える。あれが二人が生活する家か。少数民族のイェンとリンが暮らす家なのか。

俺は……はやる気持ちを抑えきれずに、走り出した。

「……おお……」

掘っ立て小屋に足を踏み入れると、俺は思わず声を出してしまった。

《次回に続く》



旅で気づいた幸福論

カオサン通りのB-BOYたち



■Writer&Photographer

田中美咲

■Age

23歳

■Profile

少しでも多くの人が幸せになるよう、人の幸せに全身で貢献したい。

対話のプロになって、そんな人を少しでも多くしたい。

渋谷で働くバックパッカー、1988年8月26日生まれ、A型。

バックパック旅(213日6大陸10旅24カ国59都市)/瞑想修行(Vipassana)/前世はインドの姫/ヨガ/コーチング/ゲストハウス

<http://ameblo.jp/awesome-misaki/>

毎年タイに行ってはカオサン通りの安宿に泊まる。いろんな国を旅していると、なんだか一人がさみしくなる時があって、カオサンに来ればほとんどもうみんな知り合いなので日本に帰ってきたかのように安心する。その中でも朝から晩までよく一緒にいるのが、クラブの前でよく踊っているダンサーの子たちだ。

大学生の時、バングラディッシュやミャンマー、インドあたりを旅して帰国するまで残った時間をタイのバンコクでぼーっと何にもせず過ごしていたことがある(追記：いや、今思うとアジア圏を旅する時は毎回だ。動き回る時と沈没する時をわけて旅をしているんだと思う)。

旅で気づいた幸福論

3年位前に初めて、いわゆる「沈没」したのだが、その時に出会ったのが彼らだった。昼に起きて、10パーツラーメンを食べて、同じゲストハウスの人たちと散歩して、屋台のフルーツ食べて、カオサンにいるネパール人のお店でなぜか店番して、夜はカオサンから歩いて20分くらいにあるタイの女子大生に教えてもらったパッタイがおいしいお店に行って、お風呂入って、2時半くらいにカオサン通りの裏道に行くと、彼らがダンスの自主練をしているのに会う。

彼らは23時くらいからカオサンの近くの公園でダンスの練習をして、24時くらいからカオサン通りにあるクラブ・レストランの前で踊る。それも雨にもマケズ、風にもマケズ、毎日踊っていた。私は暇だったからずっと彼らのダンスを毎日見に行ったり、彼らも私がいることがあたりまえになっていた。

時間が経つにつれて彼らは心を開いてくれたのか、私をダンスの練習や打ち上げにも連れて行ってくれたり、バスの始発がくるまでみんなで大騒ぎしたりもした。大体彼らが「女の子は払わなくていいよ」と言って、私は1銭(いや、1パーツ)も払わないで毎日をただ彼らと踊りながら暮らして、踊りながら寝る生活が続いた。そんなことをタイに行ったら必ずとっていいほどやって暮らしている。(今も)



しかし、日本に帰ってふと我に返った時、「あのダンサーたちは毎日働いていないし、チップなんて1日1人30パーツくらいだし、将来大丈夫なのかな？」と、なんだか不安というか、大丈夫なのかなと気になってきた。一緒に遊んでいる時は将来のこととか、未来のことは何一つ考えなかったけれど、私自身がもうすぐ社会人になる頃だったので無性に気になり始めたのだ。

今は良くても、これから家族ができた時に必要なお金や、体力的にダンスが踊れなくなった時に貯金がなかったら生きていけないし、今でさえ儲かっているわけじゃないので、タイの情勢や環境が変わってダンスが出来なくなったらどうするんだろうと、ネガティブに考えれば生活するのも一苦労な状態だと思った。

ダンサーの中には小学生くらいの子も何人かいるので、学業の面でも心配になる。最低限のことを知っていないと、何か犯罪に巻き込まれた時や、新しく仕事をしようにもタイ語を書けなかったり、間違った情報だけで過ごしていくのは怖いと感じた。

Facebookやskypeで日本にいても連絡を毎日取っていたので、単刀直入に、

「将来の夢は？」

「これから5, 10年後とか何したいの？」

「今の彼女とは結婚を考えてるの？」

「生活費ってどうしてるの？」

「働けなくなったらのお金ってどうするつもりなの？」

など、ごりごり聞いた。通じてないな—と思ったことは、タイに行って聞いてきたりもした。すると、こんな回答が返ってきた。(※タイ語でのやり取りを、私が日本語に訳しています。)

「僕らはダンスが好きだからこうして毎晩踊るんだ。お金なんていらない。ダンスを続けるための飲み物とカオサンまでのバス代さえあればいい。将来？そんなの考えないよ。今はダンスがしたいからダンスをする。いつか他の事をしたくなったらそっちをする。お金が欲しかったら働けばいい。でも今は、踊れなくなるまでダンスを踊り続けるよ」

「日本人は本当幸せじゃなさそうだよね—。毎日好きなことを我慢して、わからない未来のためにお金稼いでしょ？今死んだらどうすんの？後悔するでしょ？まだ僕たち若いんだからさ、20代の間は好きなこと思いっきりした方がいいんじゃない？30歳くらいからなんかあったら働いたらいいじゃん」

納得できる部分も多い。考えさせられた。

実際、日本で出勤ラッシュの時間に乗る東急東横線には、この子たちのように目を輝かせていたり、満面の笑顔の人はほとんど見かけない。渋谷を歩いているだけでも、笑っている人はいても、なんだか目に芯があって、幸せを感じながら継続的に笑顔でいられるものではないような気がする。作り笑顔というのだろうか。

日本人たちの顔や生活や仕事を見ていると、こうしてタイで、今だけを見て生きるという幸せの創り方もあるんだな—と思った。賛否両論あるとは思いますが、ストレス社会で鬱になったり、自殺が多い部分の日本を見ると、彼らの生き方と幸せの感じ方は今の日本にはない大切な「幸せのあり方」なのかなとも思う。

彼らの生活にもかなりのデメリットはあるが、いつかのお金を貯めるために自分の身を削る、そんなデメリットだけを見た時に、どちらも変わらないのであれば「今幸せであること」を考えた生き方をしてもいいんじゃないかと思う。

いつ死ぬかわからない、予想もつかない人生なら、自分が幸せである状態を選択していくべきだ—と思った。



日本語



旅先の

海外の旅先で見かける、どう見ても変な日本語。看板やメニュー、商品やチラシに至るまで。笑わせてくれる「変な日本語」をTwitterで集めて見ました。



タバコを違法に吸う人は、まるで優遇されているかのように？日本語は難しい。マカオ
<http://twitter.com/kosuke375>



「カリカリの男性」？とても美味しそうではないのだが。 フィリピン
<http://twitter.com/yucaLAvida>



「ツチメテナフマホチ」？「エロイムエッサム」「エコエコアザラク」くらい（古過ぎっ）もう何がなんだか理解不能。バルセロナで見つけたトートバッグらしいのですが、現地ではカタカナがファッションブルなの？
<http://twitter.com/ericon0414>



Brali Biz

「旅」×「ビジネス」

旅を旅だけで終わらせない。そんな考えの人も少なくはないはず。旅を何かに活かしたい。仕事をしながら旅をし続けたい。旅に関わる仕事をしたい。旅人を相手にする仕事をしたい。

実践している人たちがいます。実践者達へストレートにインタビューを試み、「旅」×「ビジネス」を検証し連載するコーナーです。



小堺正樹



第1回

★プロフィール

MASAKI 旅が仕事の男

1981年7月29日生まれ 愛知県出身 独身

アメリカ遊学後そのまま世界一周に出て旅を極めようと決意。

現地で買い付け、撮影、執筆、モデル、広告、テレビラジオ番組出演、その他色々しながら渡り歩き30の時点で143か国入国。

日本で働くより海外で買い付けに専念したほうが稼げるという不思議な男。

今後は30代をかけて日本の最先端起業ノウハウを効率よく吸収し世界に拠点を造り宿等の複合施設を設立、そして世界旅行をネタにしたあらゆるメディア形成をしていくべく活動予定。

執筆、飲食経営の勉強、更に見ていない国への渡航もしていきます！

<http://www.worldwidehunters.com/>

本コーナーの第一回目は世界を駆け回りながら世界の商品の仕入れを行なっている小堺正樹さんとMASAKIさんにインタビューをお願いしました。

---どんな事業をされていますか？

まさに旅を仕事にしようと思い、旅しながら買い付けをメインにして生活できています。国ごとに状況は常に変化していますが、途上国では雑貨を、先進国ではファッションアパレル商品を中心に仕入れながら旅しています。旅しながらの趣味の延長に近い形での事業です。雑貨も服も元から自分が買うことが多かったため趣味の延長です。

---受注してから買い付けされるのでしょうか？売れ筋を買い付け、または売れる見込みで買い付けてから販売されているのでしょうか？

途上国の雑貨か先進国のアパレルかによって違いますが、雑貨の場合もアパレルの場合もある程度リサーチしてから買い付けています。どの品かによって送料や利益率、売れる数の割合も違うし、国ごとに物価や滞在にかかる費用やら売れる品も全然違ってからです。それらを実際にやってみたりして体感する実験のためにやっている感じです。

---販売方法ですが、店舗販売、または通信販売、ネット販売と色々ありますが、こういった方法で販売されていますか？

全部経験済みです。今後も品に合わせ、パートナーに合わせ、そして場合によっては自分が現地から販売していきます。

---顧客はどのように集められていますでしょうか？（営業活動、宣伝や広告、SNSやブログなどの他メディアの使い方など）

海外にいる時は、全てメールやインターネット上のSNSやブログ等です。どうしても海外にいる時は日本にいるパートナーや関係者に直接会うのが難しいのでそうになっています。しかし、日本滞在中に関係者に営業したり会ったりはあります。なので日本に戻ると色々な関係者に会うことが多いですね。

---顧客像はどういった人達でしょうか？（例えば30歳代のOLが多いとか、通販会社への卸しなど）

最近の欧米のアパレルはやはり20～50代の女性が多いですね。欧米のファッションはオシャレなので繊細な日本人女性には服へのこだわりがある方が多いからでしょう。雑貨はジャンルによって様々ですが、やはりインターネットを使うことでこちらの活動が伝わるので若い人が多いです。50代以降はネットを使う人が少ないからでしょうか。

---具体的にはこういった商品を扱ったことがありますか？（どこの国で何を、など）

ロシアのマトリョーシカ
モロッコのモロッコ雑貨
ヨーロッパのモンクレールダウンジャケット
トルコのバックギャモン
世界各国のスターバックスマグカップやタンブラー
パラグアイのアルパ(ハーブ)
中東のアザークロック





---いつから始めましたか？

旅自体は学生時代から、そして世界一周として動き出したのは2006年の1月から。そしてそのまま旅しながら生計を立てようと思って事業として動き出したのは2008年4月頃でした。

---始めるまで準備期間は？

昔からの趣味の延長なので難しいですが、ある意味2006年から2007年ごろまでの、実験的な世界一周しながらの買い付けが準備期間になるのでしょうかねえ。一般的な前例がある事業に比べて、準備期間としての期間を明記するのが難しいですね。僕の場合。この起業のための準備だと思って動いていなかったのですが結果としてそうってしまったという感じです。

---起業するきっかけはなんでしたか？

単純にこのマガジンを読まれている大半の皆さんと同じように旅が好きだったので、それをお金がない若い時期にもっと続けるにはどうしたらいいかを考えた結果、趣味のスノーボード用品を海外から安く買って、自分で使ってみて合わなかったら日本で自分で金額を決めて売ってみたり、ニューヨーク滞在中の学生時代に現地で買い付けた服や世界の雑貨をオークションで出してみたり。

中国一周した時に買ったお土産の一部をオークションで売ってみたら高く売れたり等の経験から、家賃ぐらい払えたり、途上国では安宿メインでの旅費ぐらい払えと予測できて、それを実験的に実行し、実際に稼ぐことができたため、イケると確信したことですかねえ。そこからこれで黒字にして世界を見た後、世界中に宿を設立しようと考えました。それほど旅が好きだったし、旅をもっと続けたいという意味が異常に強かったのがきっかけですね。

---資金額と資金の準備はどうしましたか？

まだまだ世界を見たい状況なんで使う一方ではありますが、一時期は大きくローンをして買い付けをしていました。今でも買い付け時期になれば最大限にローンすることもあります。まずは自分がやれると思ったことをやってみることからだと思います。自分の用意できる範囲の資金でできることから、資金が無い頃は特に安宿の情報収集に力を入れて、旅費をいかに安くするかにこだわっていました。そして、その情報収集自体が楽しいのです。一文無しならまずは節約して最低限の資金を貯めるのみ。それすらできないのなら本当に起業したいのではないはずです。

---事業の醍醐味、旅との係わり、やってて良かった、面白みなどはなんですか？

世界の全てを見たいという単純な思いを仕事も兼ねて実行できていること。そして買い付けや各国滞在時に世界の生活を実際に自分で体験できる点や、面白い文化に触れることができる点など。常に新たな地域に移動していく生活であり、この生活自体が面白いですね。色んな食事や出会いや別れ、事件など、地球規模での刺激を常に吸収できる点が面白いです。

---設立で苦労された点と継続で苦労された点は何でしょう？

資金はもちろん若い人が苦労するところ。今でも基本的に自分が動かなけれ

ば何も得られない、旅が仕事というスタイルですので、常に身体が動いていてモチベーションを維持しないといけないところですかねえ。いくら好きな旅でも143か国も入っていくと、体力的にも精神的にもしんどい地域が多々あって、それでも動いていかないと何も稼げないし動かない。

これこそが苦勞でしょうね。ただし、この苦勞は凄くいい苦勞。自分がしたいことをやっけていてしている苦勞なのでちょうどいい苦勞です。苦勞がない人生なんて面白くないので。自分で苦勞の度合いをコントロールできる余裕があればいいんじゃないですか。間違った苦勞をしないことです。

---今後の展開予定や目指すところなどを教えて下さい。

とにかくまずは旅を極めたいという状況です。極力多くの国そのものを体感したい。そして世界を見た上で、世界全大陸を舞台に拠点を作っていき宿、飲食、そして日本の最高の快適なモノコトを持ち込みつつ現地の人、そして世界にいる日本人に喜んでもらえるような事業をしていきたいと思います。このインタビューを受けている時点での目標、まずは最初の国での宿設立が第一目標です。この辺は僕自身が動くに従って常に変化していきます。

---目標はどれくらい先に設定されていますか？

また最初の国が決まっていたら教えて下さい。

30代全てをかけてやっていきます。現在30です。

最初はまだ選定中ですがブラジルが候補です。その他、ロシア、トルコ等。

---旅に関する起業を考えてる方へアドバイスまたはメッセージをどうぞ。

その人ごとにどんな起業をしたいか、どんな業界か、どの国か、等様々な要因があると思いますが、一番は自分が納得できる充実できる環境で生きていけるかどうかだと思います。人により何がしたいか、どれほどの能力があるか、体力があるかなど違います。全てを統合した上で自分で判断を下し、実行するのみだと思います。人生は一度しかないわけだから、僕は旅が好きで、たくさんの国を見たいと思って実行しているだけ。好きなことで起業するのが一番いいと思います。

好きな事であれば絶対に続きます。現に、旅しながら生計立て続けるなんて、あまり前例を聞くことが無いこの生活を実際に実行できちゃっているわけです。旅が好きだから自然と方法ができあがり、実行していける。どんな事業でも極論はここにあるんじゃないでしょうか。

人生一回のみ！若い時点でやりたいことを実行できればできるほど、早い段階から好きなことを極められると思います！当方の存在を知ることによって刺激を受けてくれる方がいることを祈ります！

---ありがとうございました。

くりはらのなんとなくひとこと



趣味から趣味の延長として旅を事業にするには、簡単なようでとても難しいが、それをひたすら実行することによって切り開いてきたようだ。

実行し続けるためには、「好き」という気持ちだけでは不足なのは当たり前だが、「好き」という気持ちが生半可でなく強いことも起因の一つだろう。

現在は成功体験を積み立てているというところだろうか。成功事例ができればあとは同じパターンで「顧客を増やす」「客単価を増やす」「再来店（リピート）を増やす」というセオリー通りのパターンに繋げて事業の拡大化が望める。

まだ事業というには小規模ながらワールドワイドでスケールはでかく、将来は世界中に宿などの拠点づくりを考えているという。

今後の動きに目が離せない。

今回はメールでのインタビューだったので、ちょっとぎこちない感じが伝わってしまったかもしれない。

次回は株式会社 旅と平和の佐谷恭さんに直接インタビュー予定です。

旅で使えるアプリ

文字通り旅で使えるスマートフォンのアプリの紹介です。昨今ではスマートフォンやタブレットがバックパッカーの間でも普及し、旅の途中も離せない人が増加中。旅を助けてくれる、旅をもっと面白くしてくれるアプリを紹介していきます。

myBackPack

旅をしていて、飛行機に乗った後や宿をチェックアウトして次の宿に着いた時などにバックパックを開けても探しているアイテムが見つからないなんてこと一度は体験してませんか？
いつも入れる場所は一緒にしているはずだけど、新しく買い足したアイテムがある時などは入れる場所が変わることも。
そんなバックパックの中身を管理してくれるアプリを発見！
もちろん無料アプリです。

使い方は簡単。

- ① アイテムを入れる場所と同じ画面のバックパックの青い四角枠をタップする。
- ② アイテム編集画面が開きます。
- ③ アイテム名や数量や分類名などをそれぞれ入力します。



- ④ 「保存」をタップすると新しい画面に切り替わる。これを繰り返す。
- ⑤ 終わる時は、新しいアイテム編集画面の時にキャンセルをタップすると最初のバックパックの写真のあるホーム画面に戻ります。
- ⑥ そして左下の「すべてのアイテム」というボタンをタップすると、すべてのアイテムの一覧を見ることができ、項目で分けられ、何がどこにあるかを表示してくれます。



旅だけでなく山歩きをする人も使えるアプリですね。無料で簡単管理のアプリなので使ってみてくださいね。



旅で使えるアプリ、知りませんか？「こないだの旅で、こんなアプリに助けられた」、「便利だった」なんてアプリをお寄せください。

情熱 不可能

さえあれば
なことは
ない

第三部 最終章

韓国青年の世界旅行記

■Writer & Photographer
ジョン・サンゲン(著)
芹川彩音 / 増山知香 (編集・翻訳)

■プロフィール
1984年ソウル出身。13歳の時に一人で韓国を旅し、その10年後には80万ウォン(約64,000円)だけを持って世界30カ国にも及ぶ世界旅行を敢行。その体験を綴った「80万ウォンで世界旅行」は発行部数4万を超えた。現在は日本で留学中。
<http://www.sanggen.com/>

【五感五色、イタリアに惚れる】

都市全体が生きた博物館のような国。僕は世界の3大港と呼ばれるナポリを訪れた。イタリアにあまり馴染みのない人々にとってナポリは3大港という事よりも、ピザの本場であるといった事のほうが、有名であろうか。

海の香りを全身に受けながら街を歩き、一步路地に入ると、次は一転して香ばしいチーズの香りに包まれる。本場で食べるピザは、味もさることながら、大きなピザ1枚が3ユーロと非常に安価だった。貧乏バックパッカーの僕にとって、安くお腹を満たせる食事は、旅の疲れを一気に吹き飛ばしてくれる活力剤になった。

ナポリのピザを堪能したらならば、次にすることはイタリアの歴史を体験することだ。イタリアには「この国は先祖のおかげで食べている国である」というジョークが存在するほど、長い歴史と同じくらい多くの文化遺産が存在する。それはさながら、都市全体が生きている博物館のようだ。

その中でもイタリアに来たら必ず行かなければならない所が3ヶ所ある。いつ水没するか分からないヴェネチア、いつ倒れるか分からないピサの斜塔、そしていつ爆発するかわからないヴェスヴィオ山のポンペイ遺跡である。ナポリから電車で40分のところにあるポンペイは、ヴェスヴィオ火山の大爆発で都市全体が火山灰に覆われてしまった悲運の都市だ。

僕はヨーロッパを旅行中、イタリアに最も長く滞在したが、上品な町とおしゃべりな人々との絶妙な調和、山と海の完璧な組み合わせ、そして舌を魅了する千の味……イタリアを一言で定義することは難しい。イタリアはロマンと趣が込められた五感五色の都市だ。3ヶ月間のヨーロッパ旅行を終え、僕は中東に向かった。

【善良な人たちが住む国、中東】

〔エジプトとの燃えるような出会い〕

エジプトといえば、思い浮かぶのはやっぱりピラミッドとスフィンクス。それは僕も例外ではなく、幼いころから本の中で見ていたピラミッドを間近で見ることが楽しみでしかたなかった。

エジプトに来る前から、古代文明の美しさに魅かれていた僕は、カイロに到着するやいなや高鳴る鼓動を抑えることができず、三大ピラミッドのあるギザ地域で最も大きなクールワンウェイピラミッドに向かった。クールワンウェイピラミッドの前に立ったときのあの感動は今も忘れられない。その大きさときたら離れた場所で撮らないと写真に入れることも難しいほどで、ピラミッドの前に立った僕は本当に小さな「点」に過ぎなかった。ピラミッドにはじまり、エジプトはまさに常識を覆し、悪魔の誘惑のように好奇心をくすぐる魅力的な歴史の国だった。けれども、そのエジプトの旅で僕は旅行中最大の伏兵に出会った。それは殺人的な「暑さ」だ。

滞在期間の短さに反比例するようになり、エジプトでは見たいものが多すぎた。僕は1日1日が惜しく、まるで戦争にでも行ったかのように蒸し暑い猛暑の中に身を投げ出してはボロボロになって帰ってくるという強行スケジュールを繰り返していた。

そしてついに、体の異常信号が発動した。50度にも達する気温の中で頭が割れるように痛くなったのだ。次いで全身から力が抜け落ち、最後には僕は倒れ込んでしまった。結局僕は一日中ベッドで横になって弱々しく天井を見上げることしかできなかった。ベッドの上でオーストラリアからエジプトまで過去のスケジュールを振り返りな

がら、これまでの体の管理が疎かだったことを反省した。オーストラリアでの貧乏生活では健康に全く気を遣わず、インドとヨーロッパでは時間を節約するために、夜間列車やバスで背を丸くして寝るのが常だった。そんな生活を1年続けてきたのだから、これは当然の報いだ。僕はようやく、「健康な体」無しには、旅行の意味がないことに気づいた。

それから僕は体を休めるため、思い切ってスケジュールを変え、エジプトの東の端、モーセの奇跡があるシナイ半島に位置するダハブへと向かった。ここならば体を休めるには最適だと思ったからだ。僕は3日間、ここで何も考えずによく食べてぐっすり眠った。平和、リラックス、自由という言葉がぴったり当てはまる場所だった。この「休暇中の休暇」のおかげで、身も心もいっそう軽くなった僕は、次の目的地を目指すために地図を開いた。

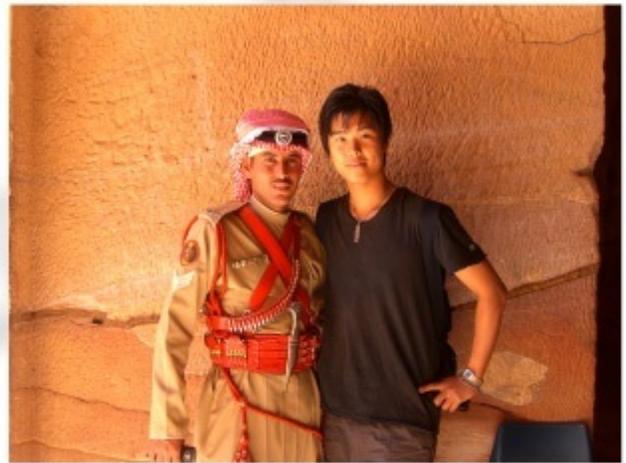
そして僕は今、中東に行く。色めがねを捨てて、中東の文化を感じる。

「お前、頭おかしいんじゃないか？」

僕が中東に行くと言うと、友人たちからは口をそろえて

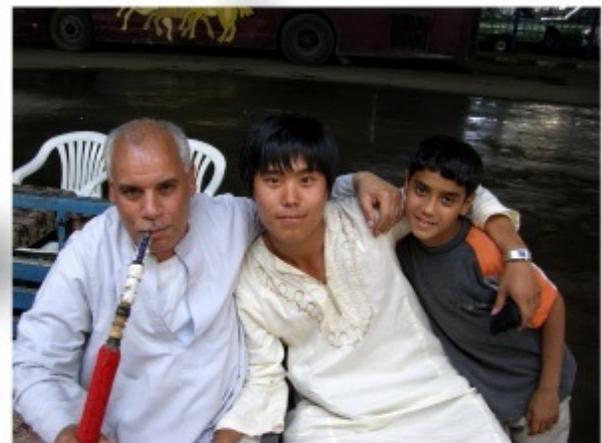
「いつ再びテロが起きるか分からない危険なところに行くなんて、正気じゃない」

と非難された。アフガニスタンで短期宣教を行ったプロテスタントたちが拉致され、多くの人々に衝撃を与えた事は、僕もよく知っている。けれども僕は、中東に関して僕達があまりにも偏った報道だけに接しているんじゃないかという気がしていた。中東には様々な国があり、複数の国を除いてはほとんどが安全な国だ。ヨーロッパとは違い、国家レベルで観光客を保護しているという点では、ある意味ヨーロッパよりも安全な場所に感じた。



そして実際に、アフガニスタンやイラクのように旅行制限国に指定されたところ以外の国では、中東を訪れることは友人たちが言うほど危険なことではなかった。これはどこの国でも言えることだが、その国についての理解を持っていれば、他国というところはそれほど危険ではないのだ。

僕はイスラム国家を旅してイスラム国家の心得を肌で学んだ。一つ目は、最も重要で敏感な宗教的な問題については細心の注意をすること。二つ目は、特に女性は服装に気を付けること。三つ目は、これは中東でもヨーロッパでも同じことで、「自分を守るのは自分しかいない」という責任を持つことだ。そして最後に、この世界旅行をするうえでも大切な事だが、ヨーロッパではヨーロッパ人、インドではヒンドゥー、中東ではイスラム教徒になるという位の柔軟な姿勢で旅することが、旅を成功させるのだと感じた。



[ガラベ－ヤを着て、イスラム教徒になった日]

どの大陸に行っても、僕が是非おすすめしたいのは「その国の伝統的な衣装を着る」ということだ。インドでも、中東でも、僕はその国の伝統的な衣装を買って着ることを好んだ。ヨーロッパを除いては、インド、エジプト、中東の伝統衣装は、非常に安く購入することができるし、伝統的な衣装を着るとなぜか地元の人たちに溶け込んだ感じがして、その国の人たちとすぐに親しくなることができた。もちろん持ち帰った服を着て韓国の明洞を歩いたものなら、蜂の襲撃のような人々の視線に刺されるような衣装が多かったのだけれど……。

インドでは、オレンジの上着と黄色のズボンを着て街を歩き回った。派手な色彩使いに最初は抵抗を感じたけれど、なんとか羞恥心を捨て去ることが出来た。ところが、エジプトに到着してみると男性がロングスカートを着て街を歩いていた。スカートなんて……我が国で男がスカートを履くなんて行為は、見世物になること間違いなしの自殺行為だ。しかし、エジプトに来たからには郷に従おう、という気持ちで、ぼくは伝統的な衣装の一つである「ガラベ－ヤgalabeya」を購入することにした。

意外にも生まれて初めて着てみるスカートは、軽くて中がゆったりして本当に楽だった。さらに、伝統的な衣装を着たことによって地元の人たちとの新密度もぐっと高くなった。全人口の90%をイスラム教徒が占めているこの国で、ガラベ－ヤを着て街を歩くと誰もがより親切にしてくれて、どこに行っても注目を浴びた。時には、真っ黒に日焼けしてガラベ－ヤを着た僕に対して、中東の人々がアラビア語で話

しかけてくることもあった。「韓国人です」と言うと“Korean no black!”とハニカミながらいたずらをする人々もいた。

こうして僕がみてくれだけでもムスリムになった後に出会った中東の人々は、まるで天使だった。少なくとも僕が会った中東の人々の中に、メディアで伝えられるようなアルカイダとウサマ・ビン・ラーデンはいなかった。

僕がいたずらで

「不治の病にかかり、今は生涯最後の旅の途中なんです」

と嘘を言うと、僕が弁解するよりも早く心からの祈りと食べ物を準備して、僕から涙を盗む人々。街で道を聞けば、10人中9人は目的地まで僕を連れて行ってくれようとしたし、短い出会いの中でも別れの時には僕の旅路の幸運を祈ってくれ、韓国人の僕につたない英語で“Good! Good!”と叫んでくれた、温かく素朴な人々。彼らのおかげで、僕にとって中東は一生忘れられない思い出の地になった。

ガラベ－ヤを着てイスラム教徒のように過ごすと、イスラム教徒のしっかりした宗教信念に驚くことが沢山あった。どこへ行ってもイスラム教の祈りの部屋があり、常に多くの人々が額を床に付けて祈っていたし、長距離バスに乗って移動する際も、一日4回の祈りの時間になるとバスを止めて降り、地面にうつぶせになって神への祈りを捧げた。

たまに好奇心旺盛な子供たちが女性の旅行客を叩いたり、スキンシップをしている時にも、

「ハラール！（イスラム法で禁じられている物事を差す言葉）」

と叫ぶと、遊び盛りの子供たちでさ

えも瞬時に動きを止める。しつこい客引きや嘘つきな店主にも

「アナ・ムスリム（私はイスラム教徒です）」

と言うと、態度が180度変わる。

先にも記述したが、中東を理解するには、彼らの宗教、イスラムを先に知るべきだと思う。イスラム教徒にとって、宗教は人生の一部ではなく全てだ。自らの人生の方式を、すべて宗教に委ねている。僕は最初はこのような生き方が息苦しくて、非効率的に感じられたし、宗教のために異文化の遺跡を壊して戦って血を流すことを理解できなかった。もちろんこれらのことは、宗教を問わず過激派と呼ばれる団体によって行われているのだけれど、これまで世界各国を旅する中で、特に僕は宗教遺跡に多く触れてきた。

ローマに立ち寄った際、世界最大の地下墓地とカタコンベ遺跡を訪れた後、心が本当に重くなる経験をした。暗い土の中で音もなく迫害の刃を受けた人々の苦痛がそのまま埋まっていたからだ。トルコの Cappadocia にも、迫害を避けて逃げてきた人々が暮らしていた、何千もの奇岩の洞窟に創られた修道院が残っている。宗教的信念のために洞窟の中に隠れて住んでいた人々の姿を想像すると、とても残念な気持ちになった。

あえて昔の歴史を持ち出さなくとも、現在もアフリカや中東の内戦の宗教が絡んだ戦争がある。イスラエルを訪れた事のある旅行者たちは、シリア、レバノンをはじめ、ほとんどの中東諸国に入国することができないことを知っているだろう。本来、宗教は人々にとって心の安息所のようなものだと思う。けれど、その心の安息所のために生活や命が脅かされている状況に胸が痛い。宗教が美しい世界のため

にやらなければならないことは、本当に多い。

いつかそう遠くない未来、キリスト教、イスラム教、仏教、ヒンドゥ教、皆がお互いに理解して新しい文化を作り、文化遺跡を前に「アッサラーム・レイクム（平和を祈ります）」と挨拶することができたらどんなに良いだろう。そんな日が早く来ることを願って、僕は祈りを捧げた。

[先入観から自由になる]

中東を旅した後、一番記憶に残っているのは壮大な古代遺跡でも、信念の強いイスラム教徒でもない。どこでも笑顔で迎えてくれた暖かさあふれる人々と、冷たいフルーツジュースを飲みながら吸ったシーシャ（水たばこ）が一番忘れられない。常に40度前後もある気候のせい、フルーツジュースを売っている店を街のあちこちで簡単に見つけることができた。

シーシャは僕たちが考えているタバコとは全く違う。水の入ったガラス瓶にホースが差しこんであり、炭で熱された煙草の葉の煙を、ガラス瓶の中の水を通し吸うので、あまり煙たくもない。味も一般的なタバコとは違って、リンゴ、イチゴ、ココナッツなどさまざまな種類があり、甘いタバコといった感じで、性別を問わず多くの旅行者が楽しむ中東文化の代表的名物だ。特にカフェでフルーツジュース一杯とシーシャをくわえるのは、地元の若者と親しくするにはおススメで、ぼくはシーシャの魅力にすっかり取りつかれ、1日に3～4時間はカフェに座って過ごすのが日課になっていた。

そのためだろうか？ 中東を思い浮かべると、「安らぎ」という言葉が一番先に浮び上がる。危険だ危険だと言われる中東が、僕にとって最も“武装解除”できる安らぎの大陸だった。

旅をし、肌で感じたイスラム文明には、未開と言われるようなことも、暴力的なことも何もなかった。問題は、硬く固まってしまった僕の先入観にあった。僕たちが簡単に情報を得られる映画やテレビ番組では、イスラムの人々は常にいつ爆発するか分からない時限爆弾のような描写をされる。そのため、「中東＝イスラム＝テロ」というイメージが、まるで公式のように頭の中にインプットされているのだ。インドに行った時にも、「インドは瞑想と思索に溢れた気品ある人々の国」という先入観を持っていったため、あまりにギャップのある「本物のインド」を受け入れるのは大変なことだった。けれども、ずっと(こんなはずじゃなかった。これは僕が思い描いていたインドじゃない!!)と本物のインドを頑なに拒否して自分勝手に風景を歪曲しては、せっかくの旅が台無しになってしまう。旅に出るときに一番最初にすべきことは、「先入観から自由になること」だと思う。自分の色めがねを外せば、旅行は新しい発見の連続だ!

【エピローグ そうして変わったもの】

皆さんが考える世界旅行と言え、どんなものだろうか。一概に言えないのかもしれないが、綿密な計画とたくさんのお金があると考える人が多いと思う。けれど、僕の世界旅行にはそれらが決して、必要というわけではなかった。僕は莫大な財産も、有り余った時間も持っていなかったのだから。

世界を旅するうえで、自分自身を前へと進めるのは、ほんの少しのお金と、たくさん汗。そしてその汗を流すことを厭わない情熱だ。僕のように、財布がいっぱいになるのを待たなくたって、いくらでも旅の中で自給自足して世界に飛び出すことはできる。僕はここにそれを証明したかった。

旅を通じ、出会った人たちの人生に触れて、僕自身の人生に対する考え方も変化し始めた。以前の僕は、「どうすれば他の人よりも成功出来るだろう?」ということばかりを考えていた気がする。けれど、他人と競い合って得る、自分一人だけの成功に、一体どれだけの意味があるのだろう。人生は誰かと共に生きた時、より美しく輝くのだ。

そして、旅から戻った僕は、「旅の中で共に生き、そして大きすぎる愛をくれた人々に恩返しをしたい」と心から望んでいた。そしてそんな僕にチャンスが訪れた。

僕の旅行記に興味を持った出版社から出版依頼が来たのだ。依頼が来た当初は、「果たして僕に本を書くことができるのだろうか?」という不安という名の葛藤もあった。けれど、「世界から僕が受けた愛で、今度は僕が世界を愛したい」という願いを叶えるにはとてもいいチャンスだった。印税を全額寄付するという形だったけれど、今の僕にできる精一杯の愛しかただった。

この世界旅行以降、僕の人生は180度変わった。旅行作家、TV、講演講師、ラジオMC、レポーター、人間国宝とアメリカでの公演など新たな分野での活動の道が僕の前に拓かれていった。

1年365日、決して短いとは言えない時間を僕は僕のために投資した。最初に僕が80万ウォンを持って世界旅行に行くと言ったとき、親友はみな

「何を馬鹿なことを考えているんだ」

と、僕の浅はかさを非難した。親友たちの言葉は間違いではなかった。本来ならば、学生時代には大学進学のために、大学進学後は、就職

のためにこそ、努力と情熱を注がなければならないのだ。そしてそれは至極、正しいことで、人が社会を築くために必要なことだった。けれど、それによって諦めなければならない夢を、僕は諦めきれなかったのだ。それによって僕は同年代の友達より大学への復学が遅れ、世間で重要視されている「人より良いスペック」も得る事はできなかった。けれど、僕のなかに後悔の気持ちはない。一歩ずつではあるけれど、僕は確実に夢へと近づいていっているのだ。僕の人生はこれからがスタートだ。

13歳の頃の幼き世界旅行では、僕はただただ、世界の美しさに感慨していた。世界の圧倒的な広さと美しさに、翻弄されるように僕は旅をしていたのだ。けれども今回の世界旅行では、ただ翻弄されるだけではなかった。「世界は美しいけれど、美しくならなければならない事の方が多い」ということを知った。世界には1回の食事に数十万円を使う人たちもいたけれど、家族全員が一日中働いて稼ぐお金がわずか20円の人たちもいた。美しさとはなんだろうか。世界の求める、なろうとしている美しさとは。13歳の頃に感じた、茫漠とした世界の美しさが、今回の旅行で、少しだけ僕の中で形どられた気がした。

世界旅行から2年、今僕は日本で新たな挑戦の途中にいる。韓国と日本は過去と未来が共存した、最も近くて遠い隣人だと思う。日本と韓国を含め、これから世界が互いに手を取り合う、地球が国境のないひとつの国となる事が僕の目指す未来だ。この未来にたどり着く過程の中で、僕は自分の役割を見つけるために努力している。

僕は常に世の中に挑戦し、学び、そして不確実で保証はなくても、意味が

あると思える日には全力で進んでいきたい。そして、この時間こそが、僕の人生の方向を決めるであろうことを信じている。

バチカン大聖堂のミケランジェロの天井画の前で誰かが僕に言った。

「人生は速度ではなく、方向だ」

ちょっと遅くても良さそうだ。その遅さが、僕が生きたい人生の方向を探した時間ならば、世界で何よりも大切な時間だから。

最後まで読んでくださった皆さま、本当にありがとうございました。

ジョンサングン - 立命館アジア太平洋大学4回生

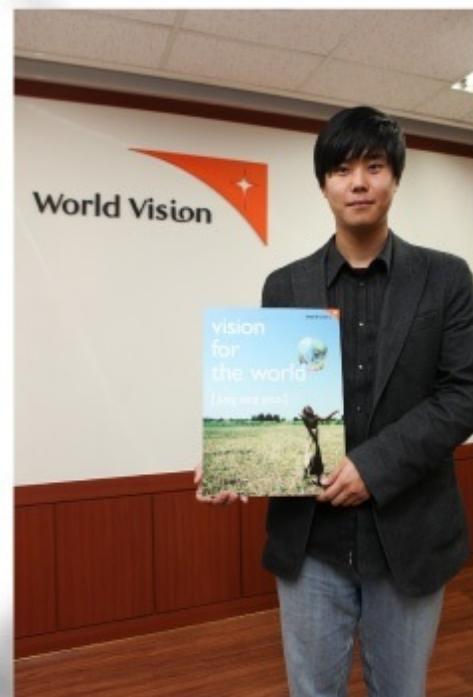
HP : <http://sanggen.com>

blog :

<http://cheerup20.tistory.com/>

twitter : <http://twitter.com/#!/sgjung2351>

facebook : [@ sg.jung @ hotmail.com](https://www.facebook.com/sg.jung)



チビロックの 旅はくせもの

少しでも長く旅をしたいと思えば、中田英寿じゃない大多数の普通の旅人は、削れるところを削ってやりくりしていく必要があるでしょう。そうなるはずとまず考えるのは宿代。

妥協点は個人差あれど、あたしの最低ラインは個室で水まわりが掃除されてて宿の人がとげとげしくない宿。窓は無くても平気だけど、さすがに鬱々とした独り言の落書きが壁を埋め尽くしてた部屋は、激変だったけど何かに取り込まれそうだったので速攻で出ました。

不具合は多々あれど、どうせ夜寝るだけだし、チップめんどいし、意外に居心地いいことに気づいた時なんか嬉しいし、と、これまで当たり前のように変宿ライフを送ってきたわけですが、今回なんと！一応新婚旅行ということで！そんなゴタクは一切忘れてカリブ海の「オールインクルーシブリゾート」とかいう新ジャンルの宿にステイして参りました（9泊中3泊のみ、他変宿）！



食事におやつに酒に面倒なチップも込み込み楽チン。1日中どこで酒を飲んでぐうたらしてても怒られないし、食事は3食ともハンバーガーやBBQなど目の前でシェフが腕ふるってくれちゃったりするバイキング。「ン〜ゴゴッギィ〜ガガガガガ」と爆音奏でるわりには水漏れ程度の水量しかないシャワーの宿で過ごしてた、昨日までの自分に謝りたい。ハンモックに揺られて読書し、ビーチチェアで普段飲まないカクテル飲んじやって「いや〜この快適さハマるねえ〜」なんて、これから隠れ家リゾートを窮める！なんて言い出しそうな勢いでありました。しかし人間、宿が変わったからってそう簡単に洗練されるはずありません。

体験ダイビングをすればあまりの要領の悪さにインストラクターに怒られまくるし、ご当地バーガー求めて地図に載ってるマックを探しまくればとっくにつぶれてたという体たらく。

そして一番のハイライトは、この養豚リゾートに集うアメリカ人ツーリスト。さすがスターウォーズを生んだ国の人だけあって、**ジャバ・ザ・ハット**（ググって！）並に膨張した身体を誇る彼ら。昼間は打ち上げられた**ジャバ・ザ・ハット**の如くビーチチェアに横たわり、夜はバーテンに酒の提供を断られるまでヒャッハーするのを、わくわく動物ランドを観る子供かのごとく、キラキラした目で追っていた私は、やっぱりリゾートを優雅にエンジョイできる人間にはなれないみたい。



■ Writer&Photographer

Chibirock

■ Age

33歳

■ Profile

Sigur RosとBeirut最頂のメタル好きバックパッカー。
チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。

<http://blog.chibirock.net/>



HANGOVER

～旅先の酒と肴～

in the world

現地でしか味わえない酒や肴の話。その酒場で出会った人の話など。

キューバの酒

キューバ通貨事情

キューバの酒事情を理解する前提として、まずはキューバの「お金」について理解しなくてはならない。

キューバ国内では2つの通貨が流通している。我々外国人、観光客が使う兌換ペソ(ペソ・コンベルティブレ、CUC)と、キューバ国民が使う人民ペソ(ペソ・クバーノ、CUP、MN)である。CUCとCUPは紛らわしいので本稿では人民ペソに関してはMN表記で統一させていただく。因みにMNとはモネダ・ナシオナル、国民のお金の意である。

兌換ペソは米ドルとほぼ連動しており1 CUC \approx 1 USD(\approx 80 JPY)である。そして、人民ペソは兌換ペソと完全に連動しており1 CUC=24 MNである。

CUCは主として、ホテル・レストラン・バー・高速バスなど外国人向けの施設で用いられ、MNは庶民向け食堂・市場・ローカルバスなどキューバ国民が日常生活を送る上で必要な施設で用いられる。

その他、キューバを旅行する上ではより複雑なルールが多々存在するが、ここではキューバには価値が大きく異なる2つの通貨が存在する、ということだけを抑えて欲しい。

キューバビール事情

さて、本題のお酒の話に入ろう。

キューバで私が出会ったビールは5種類ある。外国人向け2種類、キューバ国民向け3種類である。

まずは外国人向けのビールから紹介しよう。

CRISTAL (クリスタル)

キューバといたらこのビール、というほどキューバを代表するビールである。緑のラベルにヤシの木のイラストが描いてあって実に南国らしい。値段はおよそ1 CUCでアルコール度数は4.9%。軽い飲み口で夏の日差しを浴びながら外で飲みたいそんなビール。



Bucanero (ブカネロ)

CRISTALと双璧をなす、キューバのビール。こちらは赤いラベルに実在したカリブの海賊をモチーフとしたイラストが描かれている。こちらも値段はCRISTALと同じおよそ1 CUCで、アルコール度数はCRISTALより若干高い5.4%。CRISTALと比べて飲みごたえがあるので夕食なんかを食べながら飲みたいそんなビール。



レストランなどで選べるのが上記2ビールである。お店によって選べるところもあるが、どちらか1銘柄しか置いていないところも多い。感覚的にはCRISTALのほうがシェアは高い。

次に紹介するのがキューバ国民向けと思われるビールである。これらは通常旅行者が行くようなレストランでは売っていない(と思う)。キューバ人がよく使うカフェテリアなどで売られている。

Mayabe (マヤベ)

これはサンタ・クララのバスターミナル近くにあったカフェテリアで発見、即購入したビール。アルコール度数は4%と低く飲みやすい。値段は1.8 MNと外国人向けビールと比べて2割以上も安い。



Cacique (カシーケ)

値段はMayabeより若干高い2.0 MN。ハバナのアンフィテアトロ公園の裏の通りにあるカフェテリアで発見(Mayabeを買ったサンタ・クララのカフェテリアにもあった)。Mayabeもそうだが、CRISTALやBucaneroと比べるとだいぶ印象が薄い。ちなみにアルコール度数は4.5%。



Whiskey Wine Vodka Tequila Sherry Beer Brandy

最後に紹介したいのが通称ペソ・ビールことCERVEZA DISPENSADA。人民ペソで買える生ビールである。その特徴はなんと言っても安いこと。330～350mlのグラスになみなみと注がれた生ビールがなんと6MN！20円もしない値段で飲むことができる。

私が初めてお目にかかったのはサンティアゴ・デ・クーバのバルトロメ・マソ通りを時計塔の方からセスペデス公園に向かって歩いていた時。一日中歩き通しだったのでカフェで一服でもしようとしていたところメニューにCERVEZA（スペイン語でビールの意）の文字。よくよく見ると6ペソと書いてある。これが噂のペソ・ビールかと思い迷わず注文。運ばれてきたグラスになみなみと注がれたビールと引き換えに半信半疑でウェイトレスに6MN渡すと何も言わずそのまま帰っていった。まさか本当に6MNで生ビールが飲めるとは感激である！

しかしここで注意しなければいけないことがある。それは他でもないキューバが社会主義国であるということだ。MNで支払う商品は基本的に低価格であるが、それはキューバが社会主義国だからこそ成り立っているのである。キューバで働いているわけでない外国人が、ただ安いからという理由で人民ペソばかり使うことをよく思わないキューバ人は沢山いるのである。



とは言えこんなこともある。

私が次にペソ・ビールに出会ったのはチェ・ゲバラが眠る町サンタ・クララ。チェ・ゲバラ廟からビダル公園に向かって歩いている途中、カテドラルの少し手前で発見。今回も迷わずお店に入って注文。ビールをグラスに注ぐ店員がノリノリだったので写真を取らせてもらった。

一日サンタ・クララの観光を終え夕方バスターミナルに向かうとき、またこのお店の前を通ってみた。中を覗くとこの店員が相変わらずビールを注いでおり、私の姿を認めると笑顔で手を振ってきた。嬉しくなってお店の中に入っていくと、何も言わないのにビールをグラスに注いで渡してくれた。なんでも私に一杯プレゼントしてくれるらしい。何回かお金を渡そうとしたがどうしても受け取ってくれないのでありがたく頂くことにした。

外国人が人民ペソを使うことに関しては確かに様々な議論がある。しかし、最終的にはやはり人、の問題なのだと思う。ただ安いから使うのではなく、キューバのより深いところに入っていきたいから使う、そんな私の思いが通じたのかもしれない（もちろん安いと言うことは大きなポイントではある）。或いはビール好きに悪い人はいない、そんな思いだったのかもしれない。理由はどうであれ、私は嬉しい気持ちでほろ酔いながらサンタ・クララの町を後にしたのだった。

次回、キューバの国民酒ラム編に続く。

■Writer&Photographer

三矢英人

■Age

25歳

■Profile

大好きだった世界史の授業に出てくる数多の遺跡・建造物を自分の目で見るため海外へ旅立ち、その魅力にはまる。世界中の遺跡・建造物・自然・酒・飯を堪能するべくいつかは世界一周、と思いながら日々次の旅への思いを馳せるリーマンパッカー。

Twitter:hideto328





旅人からの伝言
「特集 ヨーロッパ」

ヨーロッパの秘境バルカン半島
プラハのサンタクロース

ヨーロッパの秘境バルカン半島



■Writer&Photographer

大谷浩則

■Age

29歳

■Profile

猪突猛進のトイレットパッカー。423日間の海外放浪を経験。

2012年4月10日から第2回海外放浪開始！まずはフィリピン留学！！

Blog:「ウィーリー 海外放浪・地球一周・地球探索 ～人生大満喫の旅～」

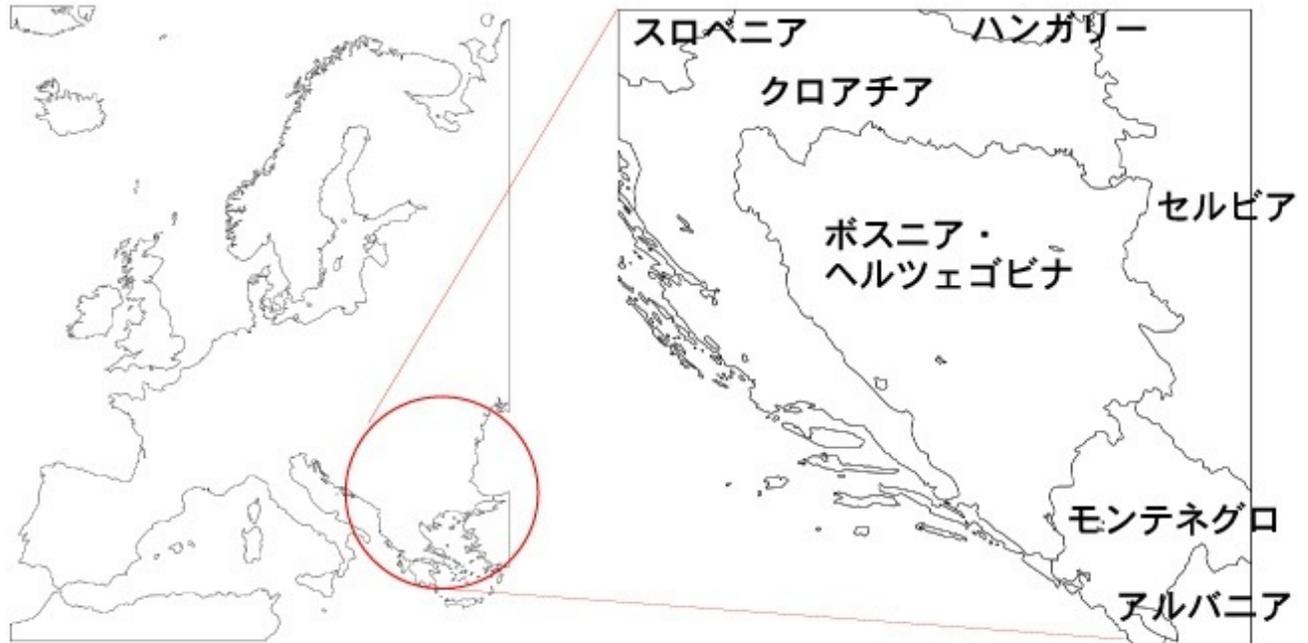
<http://ameblo.jp/hero23/>

ヨーロッパの秘境ってどこ？と聞かれたら私はバルカン半島と即答する。

まだまだ未開発の地、情報が比較的少ない、宗教が入り混じっているから興味深い、などが理由に挙げる。今回は、バルカン半島縦断の旅をお伝えする。観光ポイントというより「旅情報」に近い。

旅のルートはセルビア→マケドニア⇄コソボ→アルバニア→モンテネグロ→クロアチア→ボスニア・ヘルツェゴビナ→スロベニアである。





偉そうにバルカン半島の旅を紹介しているが、実は当初行く予定はなかった。グルジアで会った旅人にバルカン半島の魅力を教えてもらい、旅することを決意したのだ。特にコソボの魅力を教えられた。2008年2月に独立したコソボを「危険な国」と勝手に思っていた。しかし、実際旅をした人物から話を聞き、安全に旅できることが分かったのだ。

バックパッカーの旅でそういうことがよくある。旅人の生の意見が一番の情報源。旅先でルート変更なんて日常茶飯事だ。バックパッカー旅の醍醐味でもある。

セルビアにはハンガリーのブダペストから夜行で入国した。まず、驚いたのが首都ベオグラード駅付近にスラムがある点。雰囲気が悪さにびっくりした。しかし、町の中心では外国資本のカフェなどもあり、若者であふれかえる至って普通な光景だった。

セルビア語で書かれた看板が心地よくもあった。このGAPがある意味心地が良い。駅を降りてすぐに感じた緊張感と、街中での明るい光景。同じ町でこうも雰囲気が異なる町もなかなか珍しい。(この感じはスコピエ、サラエボでも感じた。GAPが大きいのもバルカン半島の魅力だ)



コソボにはマケドニアの首都スコピエからバスで入国した。驚くことに入国・出国スタンプがないのだ。係員は笑顔で「No problem!」こちらは不安で仕方がない。大問題だ。

イメージとは恐ろしい。コソボは「独立後間もないため、町は壊れていて、雰囲気は悪いのだろうか」と思って入国した。しかし、西欧の洗練された大都会ではないが、都市機能はきちんと果たしている。夜も賑やかでBARは地元人・外国人で賑わっている。

もちろん、まだ独立したばかりの国。至る所に戦争の爪痕はある。世界遺産に登録されているグラチャニツァ教会には重装備をした兵士が目を光らせていた。独立記念博物館でのコソボ独立の歴史に閉口した。自分と同じ年の若者が10代で戦争に参加していた事実……。

旅をする上で「イメージ」はよくない。実際足を運んで事実を見ないことには物は語れない。偏ったイメージは旅の幅を狭くする。そんなことを思ったコソボの旅だった。

イメージといえばマケドニアの大観光地オフリドについて一言。ガイドブックに掲載されているカネヨ教会を見て私はオフリドに行くことを決めた。その雄大な風景を見たいと思ったのだ。しかし、実際は写真のイメージほどの雄大さは感じられなかった。そのためカネヨ教会を目の前にして私は大変ガッカリしたのだ。「あれ??想像以上に教会が小さい……」写真から得られるイメージは大きい。イメージを膨らませた私は過剰に期待した分ガッカリしたのだった。

※オフリド自体はとても落ち着いた街だ。狭い路地を散歩するのが最高に面白い街だ。ぜひ一度訪れてほしい。



バルカン半島には「街歩き」をポイントに旅すると面白いかもしれない。特に路地好きにはたまらない。クロアチアのドブロブニクは有名だが、モンテネグロのコトル、アルバニアのベラット、ボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボ。それぞれ種は異なるが、歩き回る価値のある街並みがそろっている。

個人的には特にコトルが面白かった。1時間もあれば歩き回れる小さい要塞都市だ。次はどんな光景が目の前に現れるのだろうか?とワクワクしながら狭い路地を歩くあの興奮は忘れられない。また、小高い丘から見下ろすコトルの街並みは必見だ。要塞都市を一望できる。感激せずにはいられない。

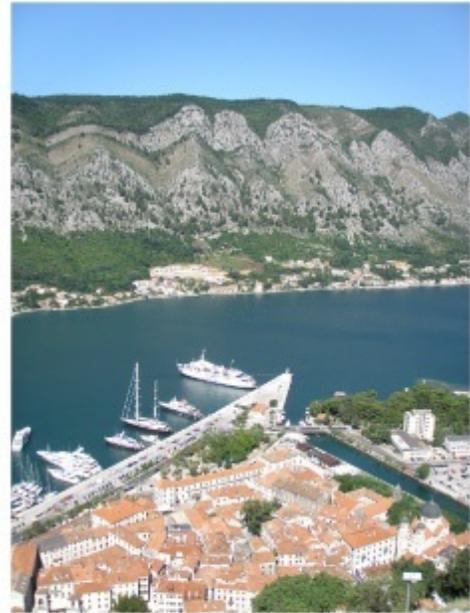




バルカン半島を実際にあつたエピソードで表すところだ。

クロアチアからボスニア・ヘルツェゴビナへの入国の際、出入国スタンプ共にもらえなかった。つまり、私のパスポートにはクロアチア出国のスタンプとボスニア・ヘルツェゴビナの入出国スタンプがないのだ。不法入国なのではないか？あまりにも不安に駆られた私はサラエボ（首都）に到着したらすぐに日本国大使館に向かった。大使館員にその旨を伝えると「この辺りではよくあることですよ。心配いりません」とのこと。一安心した。救いの声だった。本当に助かった。「それより、サラエボの治安が悪くなっているので何かあったら大使館に逃げ込んで下さいね」だそうだ。土日襲われたらどうなるのだ？大使館は閉まっている……。

こんな感じだ。



ヨーロッパ旅で比較的に見逃しがちのバルカン半島。しかし、見どころは思った以上に多い。少し時間を使ってバルカン半島を周ってみると「イメージ」を覆す様々な発見が待っている。行く予定ではなかったバルカン半島がヨーロッパ旅のハイライトだった。

ぜひバルカン半島を訪れてほしい。



プラハのサンタクロース



■Writer&Photographer

bin

■Age

26歳

■Profile

2009年春に初海外&初一人旅をデビューし、これまで東欧を中心に10ヶ国でくたく散歩。好きな国：①チェコ②ブルガリア③イエメン。

Blog：【bin】世界中がおもちゃパコ (<http://bintravel.exblog.jp/>)

12月20日：チェコ、プラハに到着して思わず笑った。一人空港で心底笑った。

この日、ヨーロッパは大寒波により天候は大荒れだった。ヘルシンキを経由してプラハに飛んだのだが、ヘルシンキに到着したのが予定の30分遅れ。それでも30分だし、乗り継ぎ便までの時間には余裕があった。外は大荒れ……。

そのせいか、ヘルシンキープラハの搭乗予定時間になっても全然案内は無い。1時間後、機内には入れたが、飛

ばない。通常、ヘルシンキからプラハまでは1時間半あれば到着する。機内に入って2時間、飛ばない。外は猛吹雪……。

更に聞いた情報によると、空港内ではストも発生しているらしい。それでも何とか当初予定出発時間から3時間半後に飛行機は飛び立った。出発と同時に機内では拍手喝采。よくテレビとかで“何か問題があったけど、無事に到着しましたー！”って時に起こる拍手が出発時に湧き起った。結局、当初予定到着時間を4時間半以上遅れてプラハに到着したのだ。



そして僕は笑った。一人取り残されたプラハの空港で。同じ飛行機に乗っていた乗客がいなくなった空港で……。

さっそく受付へ行って、僕は言った。とびきり美人なお姉さんとお喋りしたかったから。

「あの一、僕の荷物無いんですけど一」

すると、連絡先と住所を書いてね。と言われ記入用紙を渡された。

「でも、僕……。今日はプラハに泊まるけど、明日からカルロヴィ・ヴァリに行く予定なんよ。しかもね、携帯電話もパソコンも持ってないから連絡が取れないんだわ。3日後にはプラハに戻ってきて、この宿に泊まるから、見つけ次第送っておいてね♪」と、とびきり美人なお姉さんに別れを告げ、夜中の空港を飛び出した。手には手荷物で持ち込んでいたカメラとレンズ3本のみで……。

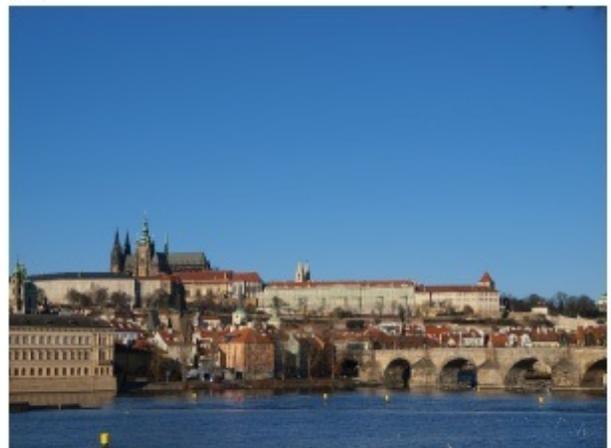
いやー、海外旅行2回目にして絵に描いた様なロストバゲージ、この先楽しみだと思い、笑いが止まらなかった。



12月21日：カルロヴィ・ヴァリに行く前に、地下鉄を乗り継いで大型ショッピングセンターへ行った。カメラセットしか無かったため、石鹸・シャンプー・歯ブラシ・下着・タオル・靴を買った。ロストバゲージにならないと来なかったであろうショッピングセンターで、チェコでの日常生活を謳歌した。プラハには半年前にも来ていたので、幸いにも観光地へ行く事に対しては、そこまで強い思いは無かったのだ。

その後、予定通りカルロヴィ・ヴァリを楽しんで12月23日にプラハへ戻ってきた。とびきり美人なお姉さんに伝えていた宿へ行った……。

「チェコ航空から僕のバッグ届いてる？空港でバッグ無くなったんだよね～」と言うが、残念ながら届いて無かった。ちなみにこの宿のお姉さんも美人だった。ここでは、空港のとびきり美人なお姉さんと区別するよう、とびきり素敵なお姉さんと呼ぶことにしよう。





僕は外に出て、公衆電話からチェコ航空へ電話した。しかし、まだ荷物は見つかってないと言われ、バッグの中身のリストと金額を送ってくれと言われた。この電話が僕の人生において初めての英語での電話だったため、若干の不安があった。電話の内容は大切なことだったのもあり、宿のとびきり素敵なお姉さんに再度電話で確認してもらった。内容は僕が理解していたもので正解だったため、宿のパソコンからロストバゲージのページに飛び、リストを書き綴り、最後に“4日後にはフィンランドに飛ぶので、それまでに届けてね♪”と付け足して、送信。

何てったって、4日後にはフィンランド北部の北緯70度付近までオーロラを見に行く予定だった。防寒具やカメラの三脚が全て失われた荷物に入っている。そこは重要なポイントだった。



その後、プラハでは日用品や服を買い足し、ほんとうに日常生活を楽しんだ。ズボンを購入する際には、「一番細くて、丈の短いやつ下さい！」と言うも、それでも大きかった。極力チェコ語で日々過ごしていたら、みんなにとっても親切にしてもらった。チェコ語しか通じないレストランで、チェコのクリスマス料理である鯉も楽しく食べることができた。

12月25日：朝起きて、ロストバゲージのサイトを確認。

“24DEC: receive”

見つかった！！“deliver: no information”だったので、急いで空港へ取りに行こう！と思い飛びだそうとした瞬間、宿の受付に見覚えのある物体が。「僕のだ！僕の荷物だ！！！」と思わず叫んだ。とびきり素敵なお姉さんが、とびきり笑顔で「Merry Christmas！！」と言いながら、荷物を渡してくれた。プラハにサンタクロースはいた。とても素敵なお姉さんが。

荷物に入れていた日本っぽい飴ちゃんを大量に持って走り、とびきり素敵なお姉さんに「Vesel? V?noce! (メリークリスマス!) Japonsk? bonbony, pros?m. (日本の飴ちゃん、どうぞ!)」と言った。お礼と愛情をこめて……。



今だから笑える、本当にあった

トホホな話



旅をしていると、日本ではとてもありえない事に遭遇したりする。そして、時に泣き、怒り、落胆し、呆然とし、赤面し・・・。そんな旅の猛者たちのトホホな話をTwitterで集めました。

★ <http://twitter.com/chutan28>

まさかロンドンの土曜日は終電が10時代とは思わず終電逃しました。ネカフェで一夜を過ごしました。

ロンドンで25ポンドだけもって、24ポンドくらいで食べれるように計算してステーキ注文したのにチップ代を入れて26ポンド請求されました。クレジットカードもなく死ぬかと思いました。結局学生であることや日本にチップがないことを片言で説明し許してもらいました。

★ http://twitter.com/y_yt

今から約17年前のこと...

イスタンブールから飛行機でルーマニアの首都ブカレストに到着し、めずらしく安宿ではなく高級ホテルのアンバサダー・ホテルにチェックインした。

で、荷物を置いてすぐ外出したら、ホテルをでたほぼ直後に、路上で両替のあんちゃんに呼び止められた。すると私服の刑事がするすると現れ禁じられている路上両替をやったなと言われ、近くのカフェに連れて行かれ財布の中身を見せろと言われた。動転した私はよく考えもせず財布をポケットからだし、百ドル札が中心のお金を、刑事だと言い身分証明書をだしたその男に渡した。男は私が渡した札を数え終わると「偽札はないようだ」と言い札を返し、もう行っていいと言われた。⇒すぐホテルに戻り部屋でお金を確認すると、7枚の百ドル札がすべて一ドル札に化けていた。

★ <http://twitter.com/masaPASS>

冬のヨーロッパ、深夜のバスターミナルで2時間遅れのバスを待ってたのは辛かった。一応、風はしのげるが寝袋に包まって震えながら来ないかもしれない不安にかられていました。フランスです。来ましたよ。12時頃発着がのバスが2時に(^_^;; “

★ <http://twitter.com/373yumiko>

とりあえずイランに10年前行った時イランのガキどもに「おしんー！！おしん！おしん！！！」と言われまくりました。日本人女性イコールおしん、らしい。今思うと可愛かったけど

★ <http://twitter.com/adilhayasaka>

ガンジス川でボートに乗り気持ちよくなりすぎて全裸で飛び込み1日20回以上の下痢が何日も続きました。体が弱いのに気持ちが前に出過ぎちゃう人は気をつけましょう。

一本の糸で世界をつなぐチャリの旅



Connection4 「Cape of Roca, Portugal >>> 0 km」

(功甫:功、儀高:儀)

功:旅のスタート地点、ポルトガルのロカ岬。

儀:大西洋に突き出したこの岬はユーラシア大陸最西端の地。

功:どうせなら世界で一番大きな大陸を端から端まで自転車で横断しよう、という思いで定めたスタート地点。

儀:ユーラシア大陸は様々な人種、文化、宗教が最も混在する大陸。

功:そこを自転車で走る。

儀:そして子どもたちを繋ぐ。

功:・・・めっちゃめっちゃ楽しそうじゃないですか！！

儀:いざ、2万キロ先の日本へ！！

功:ポルトガルの石畳の道に石造りの家々が立ち並ぶ町並みは、まさにヨーロッパ。



儀:ところが、ひとたび街を外れると広大な畑、迷路のような森の小道、道もろくに舗装されてない。羊の群れに道を塞がれることもしばしば。



功: 予想に反して全く英語の話せないポルトガル人。道を聞いても「Sempre!! Sempre!! (まっすぐだ!!)」しか言わない。(笑)

儀: おかげで道なき道をすすむこともあったよね。

功: 出発二日目にしてね。(苦笑)

儀: そんなポルトガルで出会う人々は皆、陽気で気さく。そしてテキトー。

功: ど田舎のカフェで樽に入った地ワインをがばがば飲まされたこともあったね。

儀: 酒の弱い僕はふらつきながら走ってました。(笑)

功: 一番最初に立ち寄ったレストランで出会ったマルコもその一人。

儀: 全くポルトガル語が分からない僕たちのために、メニューを端から端までジェスチャーで丁寧に説明してくれたシェフのマルコ。

功: 「モ?」とか「メ?」とか「ブ?」とか、ときには鳴き声を使ってね(笑)

儀: そればかりか、Youtubeで探して来た日本の国歌を店内に流してくれました(笑)

功: 別れ際には、マルコにはもったいないぐらいのかわいい娘さんに系を結んでもらいました。



儀: ありがとう、マルコ。

功: 古いキレイな石造りの町並みと、豊かな自然、そして気さくな人々のおかげで僕たちの旅は最高のスタートをきることができました!

Connection5 「Alcorisa, Spain >>> 1173km」

儀: さ、寒い。

功: 宿、宿はどこだ。

儀: 行けども行けども宿は見つからず。

功: スペイン内陸部の山坂がひたすら続く高原地帯で冷たい雨に降られ、凍えながら走っていた僕たち。

儀: ヨーロッパは街と街の間は何にもない。ひたすら畑、森、牧草地帯。

功: この日は当初予定していた街に宿がなく、その次の街も、その次の街も宿がなく、夜が近づきグングン気温が下がっていく雨の山道を泣きそうになりながら走ってました。

儀: そしてやっとの思いで宿を見つけることができたのは、予定よりも40キロも先の岩山に囲まれた古い街アルコリサ。

功: 服も自転車もドロドロになり疲れ果てた僕たちはこの街で1日ゆっくり休憩を取ることに決めました。

儀: 翌日目を覚ますと窓の外は昨日とは打って変わって雲一つない快晴！

功: 宿のおばちゃんに、どこかこの街のおすすめスポットはないか、と尋ねると、「岩山に登りなさい」と。

儀: 岩山?! なんじゃそりゃ、と思いつつも他にやることもなく、街のこともよく知らないのですぐ近くにあった岩山に登ることにしました。

功: 岩山を登ること30分。意外と険しく汗だく。まったく休息日じゃない(笑)

儀: でも、山のとっぺんに到着してびっくり。

功: 崖の上にそびえ立つ古い教会。眼下には岩山に囲まれたアルコリサの歴史ある美しい石造りの町並み。崖の下には闘牛場。





儀：おばちゃん、たしかにすごいよ、岩山！

功：と、そこに崖の下の方から道なき道をはい登ってくる子どもたちが。

儀：系をつないでもらうチャンスだ、と思い子どもたちの方に歩いていくと、そこには街の住人と思われるおじさん、おばさんたちの一団が。

功：例のごとく、言葉の通じない彼らに系を繋いでもらおうと、系のかたまりと手描きの世界地図を見せながら身振り手振りで必死に説明。

儀：説明してるうちにみんなみるみるテンションがあがって行って、「お前ら最高だよ！これからパーティーあるから一緒にパエリア食おうぜ！ついてこい！」と思われるニュアンスで誘われ、言われるがままについていくと、なぜか岩山の教会の中に。

功：なんのためらいもなく教会の奥へ進んでいくおじさん。そして、全力で教会の鐘を鳴らすひもを引っ張る彼。

儀：鐘がぶっ壊れそうなほどガンガン鳴らしまくる。

功：それに便乗して子どもたちもガンガン鐘を鳴らしまくる。

儀：岩山のまわりに教会の鐘の異常な爆音が轟く。

功：ここでおじさんが一言。「この鐘は、これからパエリアを作るぞ！という合図なんだ。」

儀：いや、やり過ぎでしょ！（笑）功：それから岩山をくだり、パーティー会場の闘牛場へ。

儀：闘牛場には見たこともないような巨大な鍋で作るウサギの肉のパエリアと、香ばしい羊の肉のおいが辺り一面に立ちこめていました。

功：そこからは、飲めや歌えや踊れやの大騒ぎ♪

儀：結局一切休憩できないまま夜遅くまで闘牛場で騒ぎ続ける（笑）

功：そして、帰り道パーティーで仲良くなったみんなと歩いていると、実はその中の一人がアルコリサの小学校の先生であることが発覚！

儀：彼女は僕たちのプロジェクトにとっても共感してくれて、なんと翌日彼女の小学校で系結びの活動をすることができました！

功：こんな偶然の出会いから広がる素敵なつながりに毎回ワクワク。そして感謝。グラーシアス！！



Connection of the Children
<http://coccococ.web.fc2.com>



田澤儀高

「横浜国立大学大学院音楽教育専攻一年。ピアノと自転車旅が大好き。小さい頃からチャリで遠出するのが趣味。将来は学校の先生になって音楽の素晴らしさを子どもに伝えたい。そしてユーラシア横断の旅で感じてきたことも。」



加藤功甫

横浜国立大学大学院一年休学中。保健体育科専攻。出会いに感謝し、日々邁進中！つながるって楽しい！！自転車旅/ボルダリング/生花/写真/読書/料理…

自炊派の手料理

旅に出たら現地の料理を食すに限る。でも物価の高い街での長めの滞在となると、さすがに外食ばかりはフトコロに堪える。そんな時は自炊。簡単で安く美味しい自炊派の手料理をご紹介します。

★ 鶏肉の親子炒め 四人分

今回は手軽で美味しいおかずをご紹介します！！

ご飯の上に乗せて丼にしても、酒のつまみにもピッタリな一品です。

材料

■鶏肉	300g
■卵	2個
■ほうれん草	一束
■人参	1/2本
■ニンニク	2かけ
■酒（白ワインなど）	少々
■醤油	大さじ一杯（15cc）
■塩胡椒	少々
■油	少々



作り方

- 1 鶏肉を一口大にカット。ほうれん草はざっくりと切り、人参とニンニクは薄くスライスしておく。
- 2 フライパンに油を入れ、温まったら溶いた卵を入れてオムレツ状の卵焼きを作る。
(この時卵を焼きすぎて硬くならないようにするのがポイント、最後にまた炒めるので半熟でもOK。)
- 3 卵は一旦フライパンから取り出して、また油を足し、次にニンニク、鶏肉、人参の順番でフライパンに投入。酒を入れて炒める。
- 4 鶏肉に火が通ったら、醤油を入れ、先ほどの卵とほうれん草を入れたらさっと炒めて塩胡椒で味を調えたら完成！！
(卵をあまり崩さないように。食材を[痛める]のではなく、さっと[炒める]感じで)

海外のキッチン（特に安宿）では火力が弱い事なんて日常茶飯事。炒め物を作る時は食材を混ぜ過ぎたり、鍋を振り過ぎたりして、温度を下げると、食材から水分とうまみが出てしまうので、気をつけましょう。強火でさっと炒める様にすれば、彩りも綺麗で美味しくなりますよ。



情報提供

谷津 達観(やつ たっかん)

懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、夫婦で世界一周の旅に！！

現地の食材や料理を学びながら、403日間、35カ国を周る世界一周の旅に行ってきました。

「家から徒歩1年☆たっかんとじんみの2人世界一周」

<http://ameblo.jp/worldjourney2010>



人生武術と旅しかない
ちょっと変わった男
沢井ブルースの

連載エッセイ
たびあるき
たべあるき

【路上屋台の野菜】タイ

はうおおお……

噛み締めた瞬間、野菜の旨味、甘味、そしてその野菜の育った土や畑の情景すら浮かんで来るような深みのある味だ。これがホンモノの「野菜」なんだろうな。日本でスーパーで売られている野菜とはまるで違う。同じ野菜という名前でも中身が山本太郎と岡本太郎くらい違う……。正直こんな野菜は日本では海原雄山しか食えないレベルだろう。

タイ、バンコクのワット・アルンを観光した後、小腹が空いた俺達はたまたま見つけた路上の屋台にいた。メニューもひとつしかない、無愛想なおばちゃんひとりで切り盛りしている小さな屋台だ。

古びて斜めに傾いたテーブルの上で、カオ・ニャオ(タイのもち米)を手で丸めながら、その名も知らぬ野菜をかじり、丸めたカオ・ニャオを牛肉のスープに浸けて口に放り込む。牛肉スープにトッピングされたパクチー(香菜)が口内に刺激を与え、鼻までスツとした香りが抜ける。

一口、一口と噛むごとに味わいが出てくる。口から喉、喉から胃へと「食べ物」が入っていく感覚が判る。口に入れた時、噛んだ時、飲みこんだ後の後味、全ての味が違う。それはまるで、タイという国をも表しているようだ。タイという国はいつも俺に違う表情を見せてくれる。飽きる事の無い、尽きる事の無い魅力を持つ国、タイ……。



「うまいなあ〜」「おいしいね」俺達二人はニコニコ笑いながら猛烈な勢いでメシを平らげる。そんな俺達を見て、さっきまで無愛想だったおばちゃんが笑顔で「アロイマイ?(おいしいかい?)」と聞いてくる。俺達二人は同時に「アローイ!(おいしい)」と即答する。余りのハマリ具合に二人で顔を見合わせながら苦笑する。

だって本当においしいんだもん。

ふと空を見たらワット・アルンの上に月が翳っていた。そんな幻想的な風景を眺めながら、もう日本に帰りたくないな……。このままここで暮らしたい。

そんな風を感じたバンコクの夜だった。



<広告>



MAISON D`HOTE AMANDE CHEZ NORIKO

「モロッコのグランド
キャニオン」と呼ばれ
るトドラ渓谷までのん
びり徒歩30分で行ける
日本人が経営するアッ
トホームな宿。
バルコニーからは一枚
岩が眺められ、手前の
畑にはアーモンドの
木々が見え春にはサ
クラのような花が咲き
花吹雪を楽しむことが
できる。

◆料金◆

宿泊代 70DH
朝食 20DH
夕食 50DH
洗濯機使用料 10DH

◆設備◆

部屋数4室
サロン
大きめのバルコニー
Wi-Fi
シャワー室・トイレ共同

日本食もO・K

家庭的な
小さな宿



◆住所・お問い合わせ◆

住所

Ait Ousalene Tizgui TINGHIR 45800 MARO

電話番号

+212(0)6 7040 4369

+212(0)6 5319 5219

モロッコ国内からは0653195219

E-MAIL

amande@hotmail.co.jp

詳しくはホームページで

<http://amandecheznoriko.web.fc2.com>



MOROCCO
TODRA GORGE

完全プライベート温泉で今度はシャワーを《中国・稲城編》

■Writer & Photographer

Chibirock

■Age

33歳

■Profile

Sigur RosとBeirut鼎足のメタル好きバックパッカー。
チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を
選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。
<http://blog.chibirock.net/>

創刊号の
アジア特集
からの
スピンアウト
連載

中国人、めっちゃ揺れてるバスの中
だったのに、テレビに釘付けになるか
らさ。

おかげでシャングリラから、稲城
(ダオチョン) というチベタン田舎町
までのバスは地獄のゲロバスと化しま
した。途中で寄ったトイレは、今世紀
最大の汚さで、あらゆるカラーの汚物
という汚物の集大成。恐ろしすぎて写
真には撮れませんでした。むしろ忘れ
たい。両脇で中国人吐きまくりだし。

ということで稲城に来ました。四川
省のね。必ず、「それ何県？」で聞
かれたけど、かつてあたしが住んでた
「稲城市」は、東京都です。



中国人ジェイ君の渾身の交渉のおかげで見つけた、変に安い宿に泊まっ
てはみたものの、部屋にバストイレない
から別の部屋のを使えと言われ、その
ようにしてたら怒られたとかチェック
アウトすんのか否かを早朝殴りこみの
勢いで問いただされたとか、色々理不
尽だったのでチベタンな安宿に引っ越
してみたりしました。

そんな理不尽宿の横の店で買い物してたら、理不尽宿の垂れ幕がものすごい音たてて落ちてきました。やった！縁起が悪いね！このままつぶれたらいいさ！



標高が高くなり、人が減り、空が広がるにつれて、自然のでかさ、人間の小ささ、ビシビシ感じるこのごろ。「そんな細かいこと気にしなくても」思想が更にエスカレートし、輪をかけて雑な人間になって帰ると思います。関係者の方々、すみません。

近くに温泉があると聞いて色めきだった我々。最近のお風呂といったら薄暗い和式便所にシャワーという、しずかちゃんなら自殺しかねないスタイルのぼっかだったのでこりゃテンション上がります。街の外にあるため徒歩では不可。とゆことで明日別の街に移動するのに交渉がまとまってたバンで連れてってもらふことに。

ところでなぜかこの街では、日本人と知ると老若男女みんな満面の笑顔で「よしよし！バッキャロー！」と元気に挨拶してくれます。交渉成立の

握手をする際も、「この馬鹿野郎！」と、やっぱりすごくいい笑顔です。一体なんのテレビ見た？ そんなのどかな良い街です。

で、温泉は、ひとり10円で完全個室。建物は非常に簡素だけど、シャワーつきで、ずっと流しっぱなしなのでお湯は常にキレイ。こりゃゼータク。で、いそいそとシャワー出そうとした



らシャワーヘッド吹っ飛んだ。

中国、そんなにネタ提供してくれなくていいから。お風呂くらい、のんびり入らせてくれ。

ところで、ここはそう中国、とにかくちゃっかりもんが多いから、ドライバーもついでに入浴し、拳句10分近く鏡を眺めてやがる。眺めるのに満足した途端、まだお風呂から出てこないジェイ君への催促へ移る身勝手な素早さには感心した。明日はこいつの、正気の沙汰とは思えないアッパーな運転で次の街、理塘へ向かいます。

より濃いチベットの街はゴミとマニ車でたくさん 《中国・理塘編》



稻城より更に標高上がりまして、濃い〜いチベット人の街、理塘（りたん）に到着しました。

雲が近い。なんたって海拔4000メートル越えの街に向かう途中の道なわけ。そりゃ雲も近けりゃ、皆チョコレートみたいに日焼けしてる。



そこら歩く人々は、写真で見たようなザ・チベット人。死ぬまでのカウントダウンといわんばかりに、そこいらじゅうで老人がひたすらマニ車回しまくっている。漢民族がドッと押し寄せ、俗っぽくなったラサよりも、リアルチベットだっていう話だよ。

子供の頃から憧れだったチベット文化圏。ワクワクしながら散歩するも、なんだか楽しくない。なぜかっていうと、中国人の中国の街よりはるかに汚い。汚すぎる。道ばた、川、そこかしこ、街全体がゴミ溜め。こりゃ参った。

しかし、もともとゴミなんかほとんど出ないような生活してた人たちに、突然プラスチックだとか与えても捨てる方なんてわからないよね。新しい物がどんどん流入して、外部から人が押し寄せてきたって、チベット人のライフスタイル自体そうそう簡単に変わるわけじゃない。そこらでこういう歪みが生まれるわけなんだな。

民族統一～みたいなスローガンを、チベット圏に入ってからよく見るようになったけど、統一って言うけど、中国さん。現地で状況目の当たりにしてるけど、全くの異文化取り込むの超めんどくさいと思うよ、やめた方がいいよ、中国さん。

ここに到着して早々に、ビザ延長手続きの関係で、明日の早朝には康定（かんでいん）というちょいデカイ街に行かなきゃヤバいと気づいた。

国慶節で連休になる前に手続きしなきゃいけないので超ギリ。みんなを早起きさせるのも悪いし、2泊ずつくらいペースで行きたいと言ってたので、先に1人で行ってるつもりだったんだけど。

そう言うと、2人共、「乗りかかった船じゃないですか、一緒に行くよ」と。

またも人に恵まれ中のちびろっく、です。



バンのドライバーに連れてかれた温泉にて、これから湯を溜めるから待てと説明されている図。

溜めたての温泉。響きはよさそうだが時間がかかりそうなので他に行きました。

公安、宿に凹まされ《中国・康定～丹巴編》

文句を言っても仕方ないので、Let's 型式で言わせてもらおうと、飛び出せ！ 内蔵！ 折れろ！ 尾てい骨！ むせろ！ 砂ぼこり！ てなチベット人夫婦のバンで、8時間。奥さんが途中で吐きまくってた以外は問題なく、康定に着いた。

薬局では色とりどりの生理用品がショーウィンドウを埋め尽くす。田舎じゃ種類少なくて選択の余地がないってのに、康定は都会なんだな～、って、そういうものは奥に置け。



練り歩きながら食べた、おねーちゃんのコネる刀削麺も美味しかったし、至る街でよく見かける、巨大な人民ダンスサークルも見れたけど、肝心のピザの延長は思いっきり断られた。

公安の、甲高い声の大柄な女曰く「明日から国慶節（連休）だからボスがいない。チベットに行くならグループピザを取る必要がある。だから連休明けに成都で延長しなさい。」

そう。成都でできることは知ってます。でも5日待たなきゃいけないのです。みんなとチベットに行きたいけど、そんなに長くみんなを待たせるわけにはいかないのです。なので、連休明けにはチベットへ行かなきゃいけないのお願いしますよお嬢さん、と泣きつくも、「よく聞きなさい。あたしにはどうにもできないのよ、わかった???」

完全敗退。

公安までつきあってくれた俊さんに、店内清潔で、安心してトイレに行けて、静かで、洗練されている中国ファーストフードdico'sのハンバーガーおごった。そしたら店員のおねーちゃんが優しくて、パイナップルチキンサンドが猛烈に美味しかったので、とても元気が出た。



dico'sサイコー！！

さて、ジェイ君が個人的経済問題のためか、急遽家に帰ってしまったので、2人になった我々は宿探しに苦戦。昨日泊まった宿は、例の如く早朝に、予約が入ってるから出てけと追いつ出されたからね。

フライヤーで見た宿に行ってみると、例の国慶節の馬鹿野郎のせいで、通常の5倍の値段。その上フロントでパソコンいじってた宿泊客は、我々が日本人とわかると露骨に不快感を表した。ちょうど反日な空気が盛り上がってたから。なんだようちらが何やっただよ。しかしフロントの女性が親切で、系列店に電話してくれたりしたが、結局どこも満室か払えない値段。

もうこれ以上そんな高い金出してこの街にいる必要もないので、次の街、丹巴（だんぱ）に向かうことにした。

公共のバスはチケット取れなかったもので、いつもどおり、バンのドライバー（丹巴出身）とバスの2倍弱の値段で交渉確定。自分が丹巴に帰るのに大金が入るってんで大はしゃぎ。ついでに丹巴に用がある、マークハントみたいな男も乗り込んできて、なんだかムカつくが車内は陽気な空気につつまれましたとさ。

荷物乗っけすぎて真ん中から真っ二つに折れたトラック、正面衝突の事故現場を横目に、我々の車も小気味よく逆走しながら丹巴到着。



なにこれずいぶん風光明媚じゃん！ たまたま近くにあった宿にあたってみると、連休中なのに親切にも、お値段据え置きで30円で3人用の広い部屋ゲット！ 一杯やろう〜と調子乗って「コーヒーワイン」なんての買っちゃってだいぶ後悔したものの、景色もよいし宿も安くとれたし、一瞬は凹んだ1日だったが、まーとりあえずは楽しむよ〜！

国慶節、爆竹なりまくりの丹巴より。

世界の標識・アイコンコレクション



アイルランド
ワンちゃんヘウコ
警告！



オーストリア
ちと不気味。。。



クロアチア 駅構内
拳銃持ち込み禁止



シリア
何か分解禁止？



スロベニア
デカイビックリマークに
衝突転倒注意？



フランスの美術館
車いすスピード
出し過ぎ注意？



どちらもチェコのアートな
標識
何を奨励し何を禁止してるのか



ポルトガル
少女誘拐？



マレーシア
撃たれる！



ボスニア・ヘルツェゴヴィナ
とにかく何もかもダメ



ベルギー
もう何がなんだか
わからない

作者・情報提供者一覧 (Bralist)

作者・情報提供者一覧

ゴールドデンウィーク弾丸バックパッカー 本文&写真

HANGOVER in the WORLD 「キューバの酒」 本文&写真

三矢英人

大好きだった世界史の授業に出てくる数多の遺跡・建造物を自分の目で見るため海外へ旅立ち、その魅力にはまる。世界中の遺跡・建造物・自然・酒・飯を堪能するべくいつかは世界一周、と思いながら日々次の旅への思いを馳せるリーマンパッカー。Twitter:hideto328

<http://twitter.com/hideto328>

「旅で気づいた幸福論」 ブータンで気づいた『幸せ』 本文&写真

ワールドハッカー

元バックパッカー、現在は職業ハッカー。

ブログ『World Hacks!』にて海外旅行関連の情報を毎日発信しています。

<http://bit.ly/WorldHacks>

「旅で気づいた幸福論」 光のギリシャ 本文&写真

96 Happy World Journey ゆーじ&ありさ

571日間世界一周終了。

旅の写真・動画・特集・日記などを通して、地球の美しさと旅のわくわくを配信中。

<http://96happyworldjourney.web.fc2.com/>

「旅で気づいた幸福論」 幸福論（前編） 本文&写真

鈴木モト

男性 静岡県出身。高校時代、陸上でインターハイ出場。ベストタイム10秒84（100M）

美容師免許、管理美容師免許取得。

MIXIコミュニティ、「鈴木が書く世界一周旅行記が好きだ」2800人突破。

http://mixi.jp/view_community.pl?id=3502328

現在、一眼レフカメラ片手に世界を放浪中。

ブログ「地球の迷い方。～世界放浪編～」

<http://ameblo.jp/roundtheworld200130/>

「旅で気づいた幸福論」 カオサン通りのB-BOYたち 本文&写真

田中美咲

少しでも多くの人が心の底から幸せだと思えるよう、対話のプロになる。現在はそのため渋谷で

働きつつ、全力勉強中。1988年8月26日生まれ。

KEYWORD:バックパック旅(213日6大陸10旅24カ国59都市)/瞑想修行(Vipassana)/クリエイティブ
/前世はインドの姫/ヨガ/コーチング/ゲストハウス

<http://ameblo.jp/awesome-misaki/>

Twitter : @misakitanaka

Brali Biz 「旅」×「ビジネス」 本文&写真

小堺正樹

M A S A K I 旅が仕事の男

1981年7月29日生まれ 愛知県出身 独身

アメリカ遊学後そのまま世界一周に出て旅を極めようと決意

現地で買い付け、撮影、執筆、モデル、広告、テレビラジオ番組出演、その他色々しながら渡り歩き30の時点で143か国入国

日本で働くより海外で買い付けに専念したほうが稼げるという不思議な男

今後は30代をかけて日本の最先端起業ノウハウを効率よく吸収し世界に拠点を造り宿等の複合施設を設立、そして世界旅行をネタにしたあらゆるメディア形成をしていくべく活動予定

執筆、飲食経営の勉強、更に見ていない国への渡航もしていきます！

<http://www.worldwidehunters.com/>

情熱さえあれば不可能なことはない 本文&写真

ジョン・サンゲン

(芹川彩音/増山知香 編集・翻訳)

1984年ソウル出身。13歳の時に一人で韓国を旅し、その10年後には80万ウォン(約64,000円)だけを持って世界30カ国にも及ぶ世界旅行を敢行。その体験を綴った「80万ウォンで世界旅行」は発行部数4万を超えた。現在は日本で留学中。

<http://www.sanggen.com/>

Chibirockの旅はくせもの 本文&写真

アジア漂流日記 本文&写真

Chibirock

Sigur RosとBeirut巔頂のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。

<http://blog.chibirock.net/>

表紙写真

旅人からの伝言 「特集 ヨーロッパ」 中表紙写真

旅人からの伝言 「特集 ヨーロッパ」 プラハのサンタクロース 本文&写真

bin

2009年春に初海外&初一人旅をデビューし、これまで東欧を中心に10ヶ国てくてく散歩。好きな国：①チェコ②ブルガリア③イエメン。

Blog：【bin】世界中がおもちゃバコ

<http://bintravel.exblog.jp/>

旅人からの伝言 「特集 ヨーロッパ」 ヨーロッパの秘境バルカン半島 本文&写真

大谷浩則

猪突猛進のトイレットパッカー。423日間の海外放浪を経験。

2012年4月10日から第2回海外放浪開始！まずはフィリピン留学！！

Blog:「ウィーリー 海外放浪・地球一周・地球探索 ～人生大満喫の旅～」

<http://ameblo.jp/hero23/>

一本の糸で世界をつなぐチャリの旅 本文&写真

Connection of the Children

<http://coccoccoc.web.fc2.com>

田澤儀高

「横浜国立大学大学院音楽教育専攻一年。ピアノと自転車旅が大好き。小さい頃からチャリで遠出するのが趣味。将来は学校の先生になって音楽の素晴らしさを子どもに伝えたい。そしてユーラシア横断の旅で感じてきたことも。」

加藤功甫

横浜国立大学大学院一年休学中。保健体育科専攻。出会いに感謝し、日々邁進中！つながるって楽しい！！自転車旅/ボルダリング/生花/写真/読書/料理...

自炊派の手料理 本文&写真

谷津 達観(やつ たっかん)

料理一筋！懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、世界一周の旅に！

現在、夫婦で旅に出て9ヶ月。一年の予定で現地の食材や料理を学びながら旅をしています。食べるのも、作るのも大好き！

「家から徒歩1年☆たっかんとじんみ2人世界一周」

<http://ameblo.jp/worldjourney2010/>

エッセイたびたべ 本文&写真

沢井ブルース

人生武術と旅しかないちょっとかわった男です。

協力

向井通浩

JAPAN BACKPACKERS LINK 代表・運営管理者。「ハニートラップ研究所」所長。タイマッサージ依存症。ホワイト餃子。

<http://backpacker-link.com>

広告

カオサン東京ゲストハウス

<http://www.khaosan-tokyo.com/ja/>

Maison D'hote Amande chez noriko

<http://amandecheznoriko.web.fc2.com/>

編集後記

1月も終盤に「Brali編集会議という名の飲み会」大阪を開催とは言うものの僕を含めて3名で乾杯した。1名は旅慣れマラリアも経験済みのハードバックパッカー。もう1名は海外経験一回だけながら渡航先は南インドという、度胸がいいんだかノンキなんだかの学生さん。こんな少ない集まりに参加するくらいだから濃い人が参加するのは当然か。

人数が少ないだけあって、マラリア体験などの濃密な話を聞くことができ思いの外楽しめた。

3月は2日に東京で「Brali編集会議という名の飲み会」を開催する。

東京は12月に第1回を開催し、10名ほど参加いただき今回は2回目。2回目は本会をはじめる前の17時頃から、今回から連載開始したBrali Bizという「旅」×「ビジネス」のインタビューを株式会社 旅と平和の佐谷恭さんをお願いしています。こちらも参加可能です。

「旅」×「社会貢献」ということも模索しています。

「旅を旅だけで終わらせない」ってなことを考えています。

今後も応援お願いします。

次号予告（2012年4月25日発行予定）

- Brali Biz 「旅」×「ビジネス」
- テーマ「Gift（与えたもの、いただいたもの）」
- 旅で使えるデジタルアプリ
- 情熱さえあれば不可能なことはない
- HANGOVER in the WORLD
- Chibirockの旅はくせもの
- 旅人からの伝言「特集 スタン」
- トホホな話
- 一本の糸で世界をつなぐチャリの旅
- 自炊派の手料理
- エッセイたびたべ
- アジア漂流日記
- 旅先の変な日本語
- 世界マイノリティ流儀
- 台湾人のみなさん、たくさんの義援金ありがとう！

記事と情報および写真の募集要項

記事と情報および写真の募集要項

次回のBraliの発行予定は4月25日です。

下記の記事や情報をお気軽にお寄せください。ご応募いただきました中から厳選させていただきます。

★記事および情報

■テーマ「Gift（与えたもの、いただいたもの）」

旅先で与えたモノ、コト。または旅先でいただいたモノ、コト。元気や勇気やヒントや考え方や・・・。

→1500字から2000字程度

■旅で使えるデジタルアプリ →旅で役に立ったアプリを教えてください。

■HANGOVER in the WORLD →旅先での酒や酒場にまつわるショートコラムをお待ちしています。

■旅人からの伝言 特集スタン（国名にスタンの付く地域）

→1500字から2000字程度

■旅の便利グッズ →旅で便利だったグッズを教えてください。

■変な日本語→海外でよく目にする「変な日本語」。写真とどこで撮影したかを教えてください。

■台湾人のみなさん、たくさんの義援金ありがとう！

→Twitterで台湾のみなさんへの感謝の気持ちを集めています。

★写真

■Brali表紙用写真

スタン圏で撮影された写真を募集します。

記事投稿および投稿に関するご質問はメールにてお願いします。

bralimagazine@gmail.com



Brali

●公式ブログ

<http://bralimagazine.blogspot.com/>

●Facebookページ

<http://www.facebook.com/Bralimagazine>

●mixiページ

<http://p.mixi.jp/brali>

●twitter

<http://twitter.com/2moratorium>

編集：くりはらのぶゆき

発行：くりはらのぶゆき